

SA24

93



027372-000-3

特47-218

東京未来繁昌記

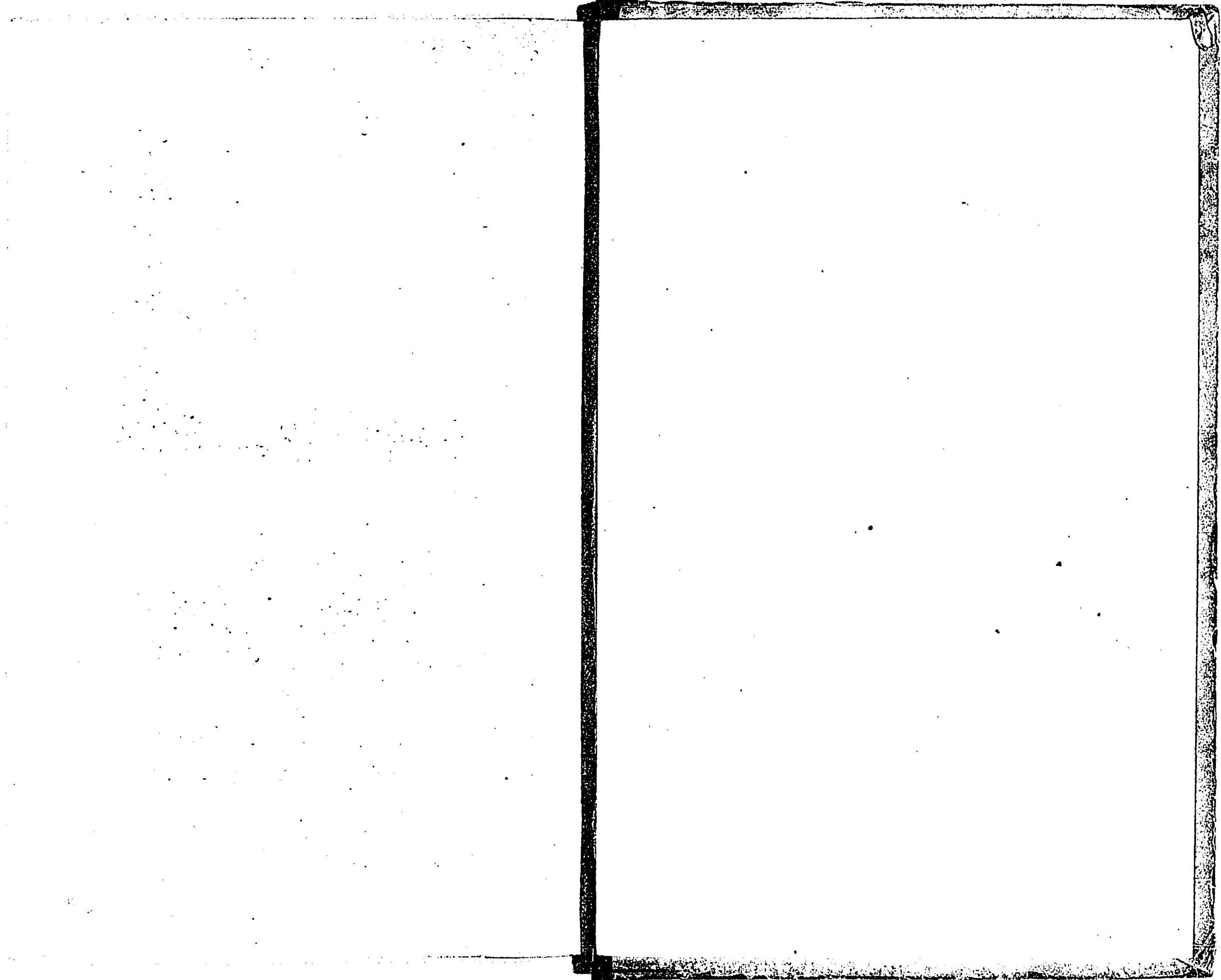
夢遊居士/著

M20

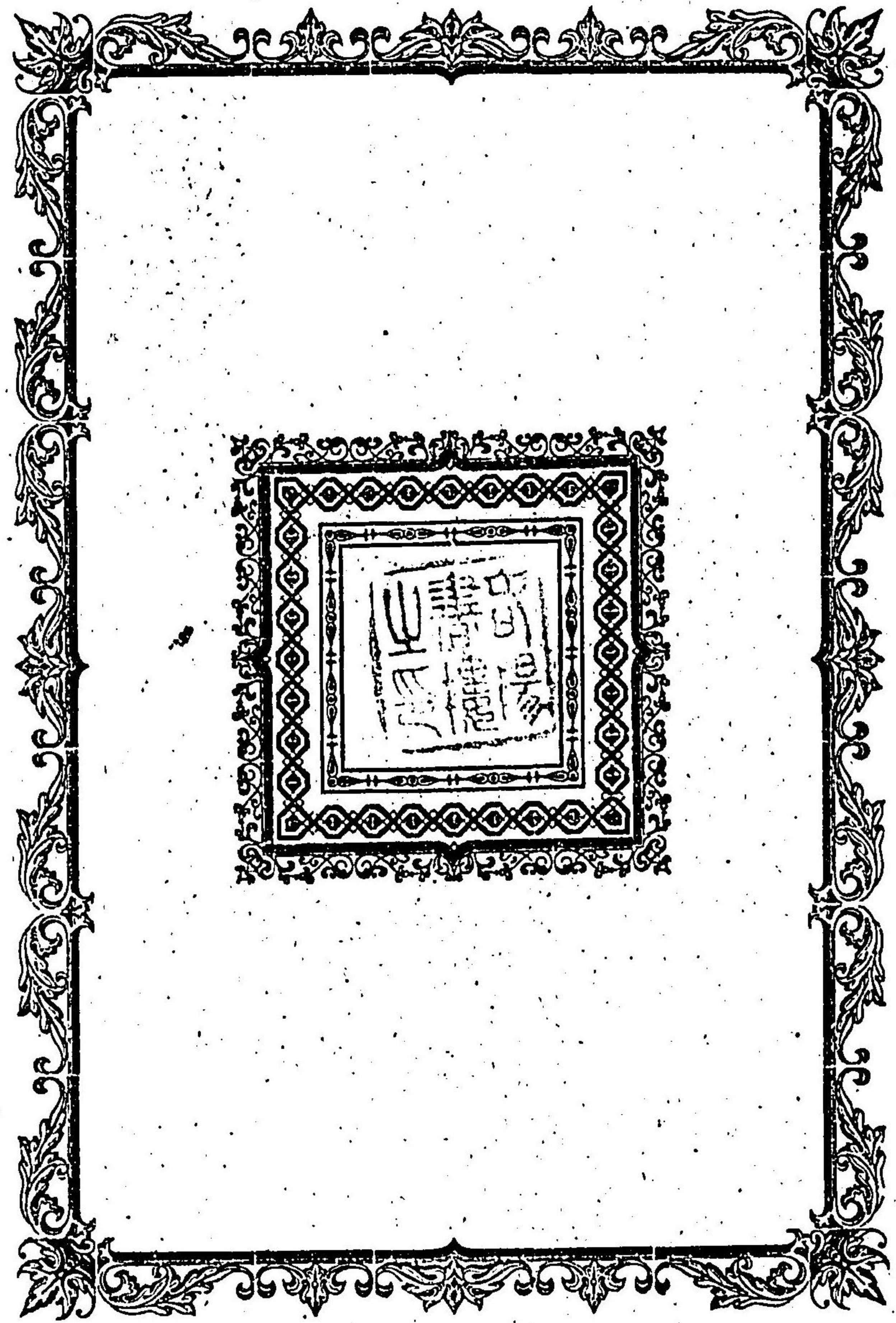
ADJ-0131







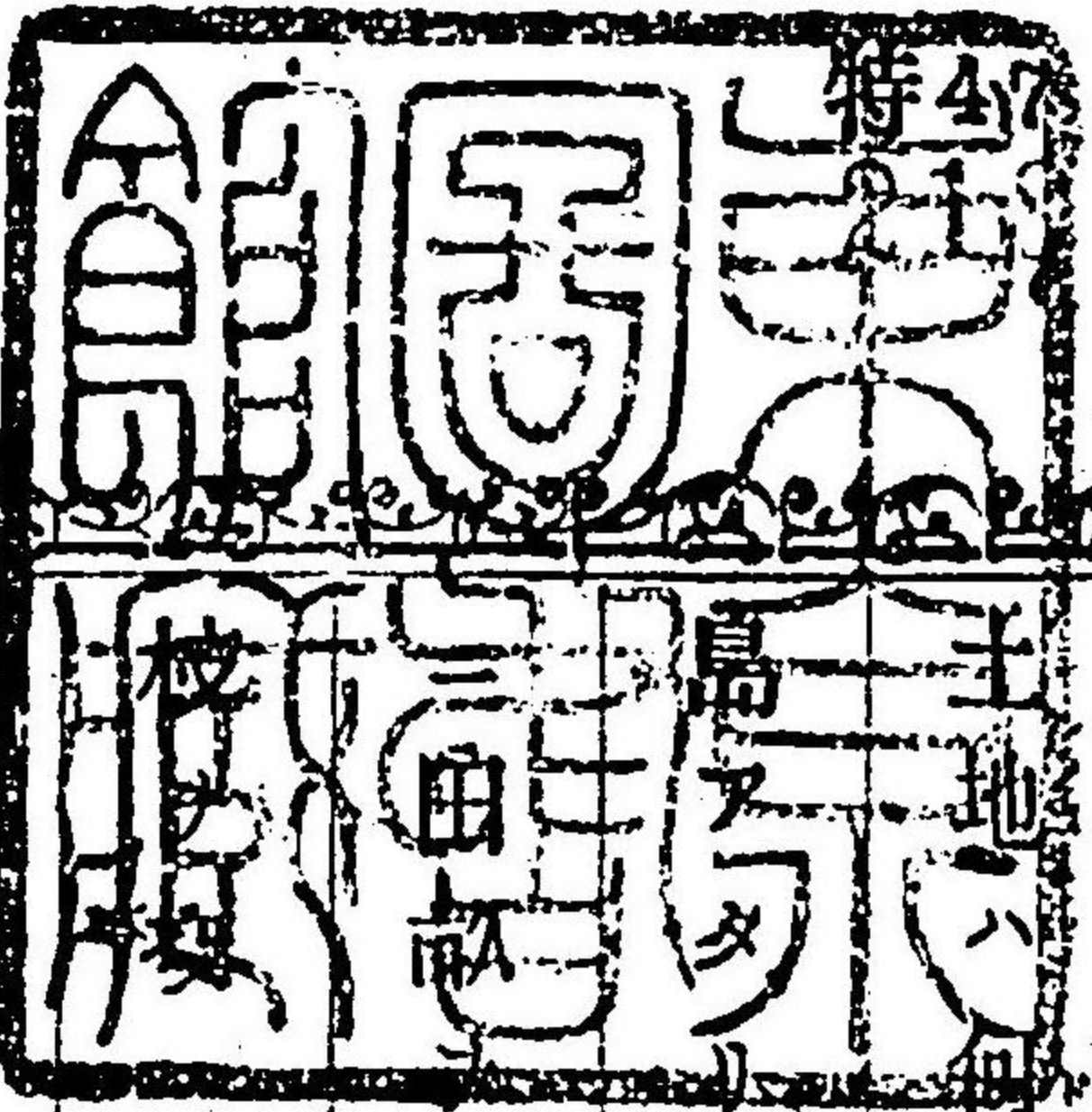






明治二十年六月十日内務省交付

東京未來繁昌記序



土地ハ何處ダカ定カナラチド何ンデモ根岸カ向

ニ或ル紳士ノ邸宅アリニ層ノ高樓遙カ

望ミ庭中ニハ泉水アツテ鬱蒼タル松樹

如何ニモ風流ノ住居ナルガ樓上ノ一室

ニハ美麗ノ洋氈ヲ敷キ漆塗リノ椅子三四脚ヲ列

ヘ前ニ圓形ノテーブルヲ置キ壁上ニハ狩野風ノ



山水ノ軸ヲ掛ケ楯頭ニハ結構ナル半面美人ノ油  
繪アリ此ノ家ノ主人ト見エ顔丸ク眼大キク色白  
クシテ深黒ノ髯ヲ生シタル美男子ガ紙ヲ展バシ  
テ何カ頻リニ書テ居ル所へ束髮洋服ノ美婦人ガ  
トシト階段ヲ上リ來リテニツヨリト笑ヒ若  
シ貴君本町の〇〇堂から草稿が出来ましたら頂  
戴をいたし度と申して参りましたソシテ先刻銀

座の〇〇社の主人が何んぞ新らしい御著述があ  
りませぬハ出版を御任せ下さります様よくれ  
も申して歸りました主人ハ首肯キヨシト云  
ヒ乍ラ心ノ内ニテハ「ナンボ金がとんと取れても  
カウ諸方の書林よ追回ひされてハ閉口ダ」是レハ  
夢遊居士ガ本書中ニ書キ入ル、ヲヲ忘レタル未  
來ノ談話ナリ居士先年久シク朝野新聞社ニ在ッ



テ筆硯ニ從事セシガ何ンボ開化ノ商賣デモ人ノ  
下風ニ立ツフハ眞平御免ト大見識ヲ立テ遂ニ獨  
立シテ小説家トナリ近來頻リニ新作ヲ世ニ公ニ  
セラル趣工ト云ヒ文章ト云ヒ太ダ以テ感心ノ至  
リ世ノ文學益ス開ケ小説ヲ讀ムモノ益ス多クナ  
リ居士モ更ニ一層ノ熟練ヲ積マル、キハ遂ニ其  
ノ筆ノ先キヨリ大廈高樓ヲ現出シ世人ヲシテ「サ

テ〜小説家の伎倆ハおそろしい者シヤ」ト感服  
セシムルニ至ラン而シテ其ノ時限ハ三年ノ後ニ  
在ルカ五年ノ後ニ在ルカハ未ダ知ルベカラズ畢  
竟居士ノ御勉強次第ニ因ルノミ

明治二十年四月十日

末 廣 鐵 腸



東京未來繁昌記

目 錄

- 緒言
- 國會
- 俱樂部 附 舞蹈會 玉夾
- 世界人類博覽會
- 西洋手品
- 日本語學校
- 內外婦人慈善會
- ホテル
- 美人共進會
- 亞細亞大博覽會



- 私窩子 附咖啡店
- 各國端舟競漕會
- 獸種吞噬會
- 内外競馬會
- 日本町
- 改良演劇

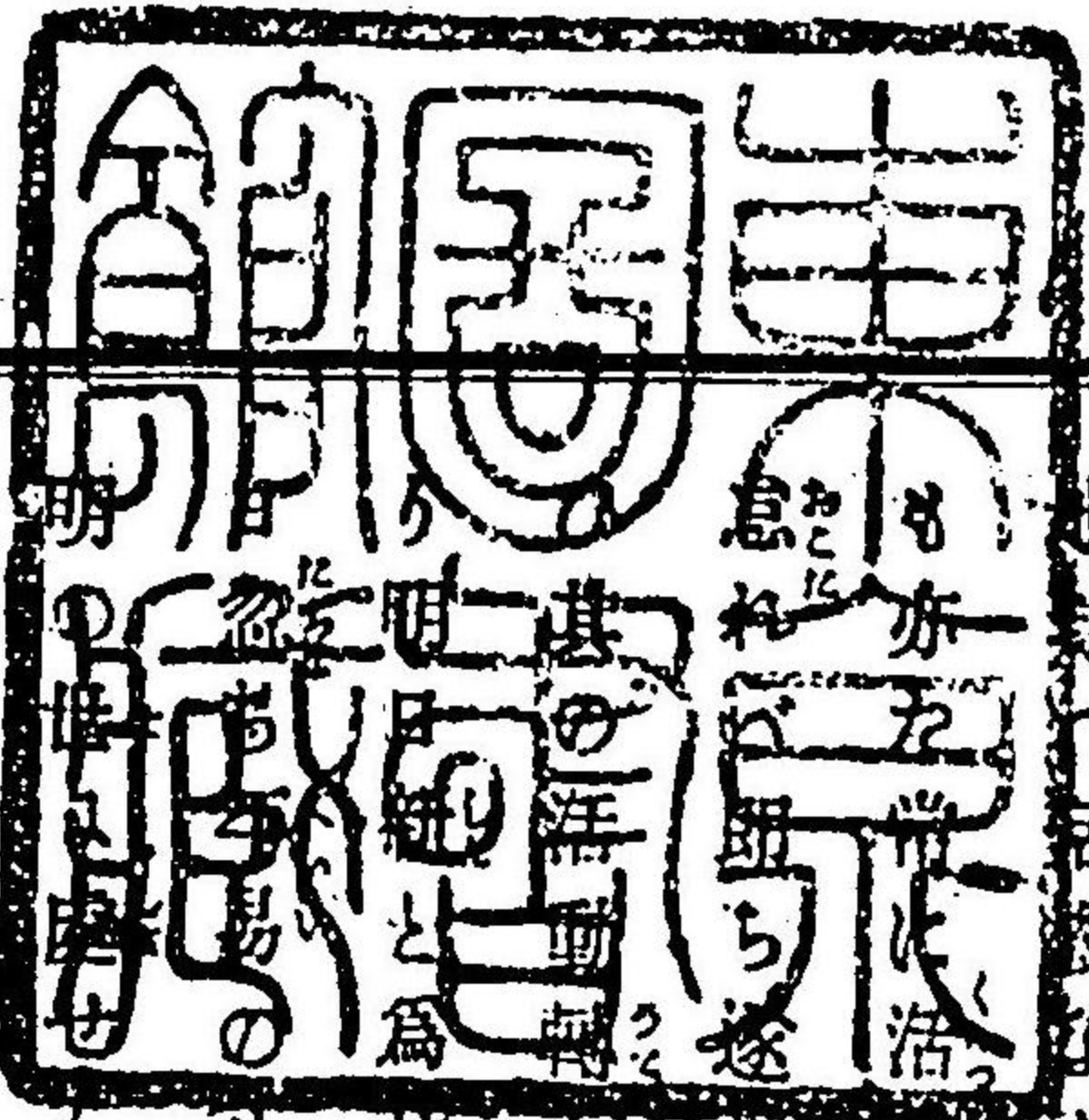
東京未來繁昌記目錄 畢

東京未來繁昌記

夢遊居士 著

緒言

地球の活動なり日夜回轉して止まざるものなり故に社會萬般の事物も亦常に活動し須臾も停止する所なきを以て吾人若し一日の業を怠れば則ち遂に之を恢復するの期なきなり蓋し人智の開發するは隨其の活動轉た繁劇を加ふるより世上の現象も亦た随つて變遷あり明の世に於て爲せしもの今日已に陳とあり今日奇と稱するものも明日の世に於て欲せば先づ我が身の活動をして世上事物の活動に打勝たしめんを勉めざるべからず否らされば遂に他人の糟粕を舐りて止まんのみ試みよ見よ我邦の維新前ハ殆んど野蠻盲昧の時代た





り而して當時道を急ぐもの駕籠に乗るを常とせり維新後人智少しく開け駕籠を代ゆるに人車を以てし次で馬車の通路を開くに至れり然れども兩ながら動物の勞力を假るに過ぎず器械的の速かよして且つ危険なき如かざるあり是に於て鐵道の設置あり一瞬千里其の早きと殆んど鐵砲丸の如し願ふに維新前駕籠に乗て走りしもの急遽を要するが爲めなり而して維新後人車及び馬車に乗るもの亦た急遽を要するが爲めなり凡そ此等の時代は當りては世上事物の運動極めて緩慢にして此の三のもの、活動は如かざりしを以て事は臨み急遽を要するの人も動物の勞力を依頼して其の用を便するを得たるなり然れども當時地球の活機たるを知らず常は他の糟粕を舐りたるもの何ぞ其の駕籠の後を附て走り又た人車馬車の後押しを爲して行く異なるあらんや其の後を附て走り後押しを爲して行く

已に人力の及ぶところなるを以て深く怪しむは足らずと雖も人智やうやく進み彼の急遽を要するもの汽車に乗て走らば遂に之が後押しを爲す能はざるを奈何せんや我が東京の日本の首府なり之を地球は譬ふれば猶ほ南北兩極のことく其の回轉の最も速いしき處となす然らば即ち我が大帝國の東京も依て活動し數千萬の臣民の東京も依て生活すと謂ふも可ならんか言を換へて之を云へば東京の盛衰は日本全土の盛衰に關し東京人の利害は日本國民の利害に係るものあり徳川氏の世幕府江戸は在り天下の政柄を執りしを以て士庶雲集百貨輻輳して富盛海内は比なく年を逐て人口大に増加し終に一時に二百餘萬に達せり之は由て六十餘州無事平穩あると二百六十餘年維新後更に京城の地となり東京と改めてより人口却て減少し一時七十餘萬に下りしと雖も固より萬機の



出るところ天下の樞軸たるを以て其の旺盛日月は加へり現二十世紀に至りての實は五百萬餘と稱す頃日英國の大宰相パーチル氏十九世紀の末は大宰相となる我が邦は來遊し東京の繁昌を見て驚嘆して曰く日本國の今後數年を出でずして古代羅馬の繁昌を致すべしとパーチル氏の言或は過賞なるや否を知るべからずと雖も我々日本國民たるもの宜しく此の言を服膺して遂に古代羅馬の盛域に達せしめざるべからざるあり東京の繁昌已に此の如くされば全國の殷富實は前古無比と稱す嗚乎また盛んならずや

十九世紀の世既に東京市區改正を行ひ條約改正を斷行しまた内地雜居を許可し國會を開き東京灣を設く其の他鐵道を増設し電線を擴張し殖産工業を奨勵し我邦の文明既に宇内萬國を凌駕せり然れども之れが萌芽を發したるの抑も熱れの地は在るか幕府の江戸は於て米國

水師提督と交通貿易の條約を結び以て文明の端緒を開き 明治天皇陛下の東京は於て萬機を親裁し以て文明の成熟を圖り玉へり然らば則ち東京の地の文明の開祖たるといまた深く論ずるを要せざるなり余無學にして文を作るを知らず然れども永く東京の地は居りて常は此等の情態を目撃するを以て竟に廿世紀の著わり名けて東京未來繁昌記と云ふ余の未開人として文明の前途を想記せんと欲するの其の及ばざると猶ほ木に縁て魚を求むるがごとし然れども僥倖として其の豫想の萬一も符合するとあらば是れ實は予が幸福なり



國會

三層の高樓巍々として雲際より聳へ碧瓦白壁燦然として相映發す屋上  
自鳴鐘を安置し時を報せるの聲の鏗々として數里の外に聞ゆ又數百  
の烟筒諸所に突起し盛んに黒烟の噴出するときは殆んど日光を掩ひ  
んとす四方廣大の園庭あり奇木怪石其中に充ち四時花卉を絶たず  
之を繞らす鐵柵を以しアーチ形の鐵門上は電氣の常夜燈あり日本  
帝國々會議事堂と大書したる扁額を揚ぐ門に入れば泉水の中は二個  
の噴水器を粧置し飛泉紛々として數尺の外に散亂す水上虹形の橋  
あり之を渡り歩して堂内に至れば只見る高樓の上下は數百の電氣燈  
を點し光彩輝々として白日は異ならず國會の重々夕刻より開く前面  
の高き處は一脚の椅子あり前にテーブルを置き青色の洋氈を覆ふ間  
はずして其の議長の席たるを知るべし傍に書記の椅子を設く一段下



りて半月形に椅子を駢列する四五重にして凡て六百有餘あり後面三方を二階造りと爲す傍聽人の來集する所なり午後七時三十分(譯聲堂)上より鳴り響けり議長をはじめ議員等一同席に就く此の時、樓下より又の庭内より出で、散歩し開場を俟ち居たる傍聽人のチリン／＼の聲を聞き等しく入來りて席に就きたり此時議長の衆議員は對ひ前會より引續き議事を取かゝるべき旨を告ぐ三百四十五番議員起立して曰く本員の前會に於て(論)論せし主意の未だ盡さざるを陳述致し(抑)抑も我邦在來の家屋の寒暑を感ずると極めて甚だしく人身の健康に害あるとの申すまでもなく火災延焼の恐れあり又甚だ不躰裁にして文明國の建築法に適應せざるを某の申すまでもなく諸君子の已に御承知の事と思ひます此を以て東京の如きの既に十九世紀の時代より於て市區改正を行ひ之と同時に家屋の改築を促がし九尺二間棟割

長屋などを市中に建つることを禁じまた東京府内至る處煉瓦若しくは石造とありしに當時の政府が非常の鋭斷を施したるに因りませう若し當時の政府が徒らに姑息手段に依頼せしならば東京の家屋の今日に至るも尙ほ依然として十九世紀の家屋たるや疑ひを容れません今本員が主張する全國一般家屋の改良も之と同様に御坐ります(ノウ)ノウ、或る論者の家屋の改良は自然の勢に任せ政府が干渉するに宜しからずと云はれたれど本員の考へては至極御尤もの議論と思はれません是に依て本員の政府の嚴令を以て全國の家屋を練瓦若しくは石造に改良するに尤も策の得たるものと思ひます此のとき傍聽人の一度はドツと笑聲を揚げノウ／＼ヒヤ／＼の聲また四方に起る「何だか途方もない事を云ふ奴が出て來たぞ」「アレは信州の方から出て來た田舎議員ぢやさうな」なるはとソナ事でもあらふ日本の



國會への折々彼のやうな議員が飛出すから實は外國人よ對して耻入る次第サ、今度ハ鬨を生した男が起たアレハ百五十番議員ぢや何様事を饒舌るか君黙ッて聞き玉へ

抑も政府たるものが盡すべき義務并に職務ハ如何なるものかと申せば生命財産を維持せんが爲めハ規律ハ依違し敢て犯違の所爲なき人民を守護し甚だ狂暴にして法律ハ從はず善良の人民を攻撃するものを防禦し之として其の惡を恣ふせしめざらしむるハ在るので御坐りませう故ハ智識いまだ發達せば道徳いまだ進歩せざる人民ハ向てハ政府ハ警察軍制その他許多の法律を設け以て人民の事業ハ干涉するハ固より當然の事よて決して不正の事とハ申されません論者の所謂十九世紀の時代ハ方り政府が東京府下の市區改正を行ひ同時ハ貧民の市中ハ住居するを禁せられしが如きハ當時ハ在りてハ固より當然

の事にして強ち特別ハ鋭斷を施したと申す程の事では御坐りません去りながら現今の社會ハ最早十九世紀の社會と同年の論ハあらず已に歐米諸州と同等の國柄となり政事ハ法律ハ東洋の模範となるべき我邦よして政府が家屋の築造にまで干涉なるが如きハ實ハ思ひも寄らぬ不正不當の處置と云ハねばなりません(ヒヤ)三百四十五番議員ハ健康ハ害あり火災延焼の恐れあり不躰裁なりと種々並べ立てられたれど此等の弊害ハ到底全國家屋改築の論據と爲すべき程の價直なきものであります請ふ其の理を説かん寒暑を感ずるとの多きよより健康ハ害あるとなし左まで心配する程なれば彼の寒暑ハ逢ふ事の最も甚だしき車夫馬丁の如きものハ到底之を嚴禁せねばなりません又火災延焼の恐れある事ハ本員も承知致し居れど酒屋へ三里豆腐屋へ二里といふ片田舎よ至りてハ是等の覺悟ハ左まで必要の事よ



あらずと思ひます又不躰裁とい如何なるものを標準と立てられしか  
の存ねを随分空漠なる御議論と思はれます(ロヤノウ)斯る空  
漠ある議論を根據として全國家屋の改築を促し之が爲め一億萬圓の  
保助金を下渡すべしと云ふに至りては實は政府たるもの、職務と國  
家の經濟を度外に放棄したる御議論と申さねばなりません(ヒヤノウ)  
論者の所謂十九世紀時代は於て東京市區改正の際市中の家屋を練瓦  
若くは石造に改築すべしとの議論を提出したるものもありしが斯く  
せんといふ少なくとも五六百萬圓の補助金を要すべし假り此金を下  
附すると定めば寧ろ之を天下に融通し年を期して成功を俟たんとい  
竟る其の利足を以て全國の家屋を改造するを得べしと或る經濟家の  
建議したるより其の議論は消滅し只だ從來下等社會の住居したる  
如き家屋を新造することを禁止他に塗屋なり練瓦なり石造あり人民の

適宜に任せ自然の改良を期したるより竟る今日の如く東京市街に至る  
ところ練瓦若くは石造と變化したることであります(謹聽々々)古來より  
の成跡已に斯の如き次第なれば本員は斷じて自然の風潮に任せ其の  
改良を圖ること實は策の得たるものと考へます(甲)イヤハヤ何れも是  
れも分らぬ事ばかりぢや一鉢アノやうな事を云ふ奴の何ういふ了簡  
で居るだらふ是でも日本四千萬人十九世紀の人口に比すれば四百万  
人の増加を見るの代議士となり國家の經濟が議せると思つて居るだ  
らふか(譯)も分らぬ連中が經濟の事を云ふからツマリ不經濟なる  
のぢやチャ今度の保守黨の議員ぢや四百二十番としてあるが名札が  
分らぬ多分出法大造といふ男だらふ(四百二十番議員曰く本員の三百  
四十五番議員の説を賛成するものであります然れども其の見る處に  
至りては少しく異なる處が御坐ります三百四十五番議員の論據の第



一健康も害あり第二火災延焼の恐れあり第三不躰裁なりといふも在  
るが如く覺へましたが本員の處見に其の中の不躰裁といふも稍や同  
一なるものであります諸君も御承知の如く人爲の事業に人智の發達  
は從てますく巧妙を極むるもので坐ります試みは彼の衣服を見  
るも太古野蠻の時代も當りて人類の獸類と同様親の胎内より生れ  
しま、裸躰で生活したものは相違ありません何故と申さば人智發達  
せざれば蠶を養ひ若くは木綿を造り之を製して衣服と爲すが如き緻  
密の考を凝らすものもありますまい故も太古の人類は稍や智識の發  
達したる時木葉を以て陰部を掩ふとを覺へまして次は身躰を掩ふと  
を考へました不完全ながらも木綿や麻もて衣服を制し被ることを考へ  
たのも實も中古以來の事であります爾後人智漸やく發達し遂は絹や  
毛織の衣服を製し今日の如く完全の衣服を製するやうなつたので

は坐ります故も太古は九裸躰中古は半裸躰であつたも相違ない今世  
に至り肌を餘計に現はすは野蠻だといふは此處から起つた理窟で  
は坐いませう凡そ人智の進むは隨ひ人爲の事業の巧妙なるは此の  
一例を以てするも分るでありませう又家屋の如きも是と同様では坐  
います太古の時代は木を切り組みて家屋を建造するといふ知慧が  
なかりしゆゑ人類も亦た獸類と同じく穴に住みて寒氣を防いだ事  
現は我邦の古書も土蜘蛛と名附けし人類のありしよて詳かでは坐いま  
す(土蜘蛛と土ともりと國音相近し)人智次第も發達するも隨ひ木を撓め  
又は之を折りて紐ひ合せ家屋の如きものを造りましたが此の時分は  
固より大工だの左官だのといふものなく今より見れば實も不躰裁  
な家で坐いました中古以來人智次第も發達するも隨て家屋の構造  
も益す巧妙となり竟も今日の躰裁を爲したので坐います(謹聽々々)



今日に至りても片田舎などへ参りますと茅や麥藁にて屋根を造り土臺もなき家も住居するものが坐います是等の家屋の末だ太古の風を脱せざるものでツマリ我邦の野蠻を看板と懸くると同じ事は相違ありません(ヒヤ)地方の議員諸君の勿論東京の議員方も地方を漫遊せられたる諸君の承知でありませうが片田舎の議員方も地方を漫遊の際に突起する一際眼立ちて立派なもので坐います其の際りも吹けば飛びさうな茅屋のあるに如何にも不躰裁なもので坐ります人あり若し二個の家を指し何れも智慧ある人の住居するを問ひ三歳の童子と雖ども煉瓦室の方なりと對ふるでありませう(ヒヤ)今更眼睛を放ちて日本全國を見渡せば歐米諸邦より渡來せし人の小なりとも煉瓦若くは石室も住居し一人として日本固有の茅屋も住むものも坐りませぬ歐米諸邦富むもの云へ一人の貧者なしとの

申されませぬ若し金なき爲め日本人の茅屋も住むと云ひ歐米人も金なきもの茅屋も住むの道理で坐りませう(ヒヤ)本員は是等の道理に依て考ふるに我邦固有の茅屋は是非とも之を全廢し野蠻の看板の急よ之を取除け度思ひませ此の會堂も列席せらるる諸君子の皆な經驗も富むお方々ゆゑ承知の如く都會の人のみ外國人の輕侮を免かれ僻隅の人のみ之を免かる能はざるに家屋構造の如何も關せずと云ふも敢て狂妄の言でありませぬ之に依て本員の警へ一億万円が二億万円の補助金を要するとも全國の家屋を改築するとも最も賛成を致します此のとき傍聽人の中より「ア、大欠伸をする者あり又冷語を以て賛成するものあり場中宛ら鼎の湧くが如く頗る喧騒を極めたり此の時獨語する者あり曰く家屋の改良の兎も角も議員の改良をせねばならぬツイ(ヒヤ)大ヒヤ)チリン」



レ閉會だ、嗚呼ツマナかつた

俱樂部附 舞踏會玉突

俱樂部の人の相集りて俱に樂しむの謂ひなり故に平生舞踏會場玉突場等の設けあり種々の宴會或は某公某伯等の夜會も亦た此に開き外國貴賓を饗應するも亦た此に於て而して平素コック、ボーイ等の佳へなきを以て料理の献立等へすべて之を其の人の適宜に任かそなり但つ俱樂部は二種あり一は顯官紳士の協力によりて成立つもの一は人民の公協に依て成立つもの是なり顯官紳士の協力に成るもの其の社會を限りて他は貸與せざるも市民の公共に成るもの相當の家賃を拂ひ、何人をも使用するを得此の法は古く西洋に行はれたるものにして我が邦に於ては山下門内の鹿鳴館芝山内の紅葉館を以て濫觴とせ然れども當時人智進まざるを以て斯の如きもの、必要を感じ

したるに只だは上流社會の一部分に止まり甚だしきに至りては俱樂部の何者たるを知らざる者あり随つて之を使用するもの、區域極めて狹隘なりき今世に至り人智の開發すると共に俱樂部の必要を感じるもの益々多く遂に市民公共の俱樂部を設置するに至れり其の構造は顯官紳士の協力によりし俱樂部と大差あることなく煉瓦を以て三層樓に築き廣大なる園庭を設けて中々種々の花卉を植へ四方鐵柵を以て回らし前門左右の鐵柱は美麗なる唐摸様を鏤出し上は二個の電氣燈を安置せり抑も此の場所たる遊樂の爲めまた饗應の爲め設けたるものなれば偏へ人目を驚かしたまた其の精神を愉快ならしむるに注意したるを以て結構の壯麗なるに云ふまでもなく一たび此の中に入れば殆んど仙境に遊ぶの思ひあらしめたり蓋し文明國人の嗜好する所のものに無上の美麗と無上の快樂とを以て是等の構造



の未だ太だ賞するよ足らず今後工藝技術の愈よ進歩するよ至らば遂  
 は如何なる構造をなして人の嗜好心を満足せしむるやも知るべから  
 ざるなり

俱樂部は於て顯官紳士の好んで催すところのものゝ舞踏會なり舞踏  
 會との男女手を携へ又の相抱ひて踊るものなり其の法は數種ありと  
 雖ども曰今魯西亞は行ゆる、所のものゝ以て最も奇となす蓋し舞踏  
 會場は出席するよの我が妻なり人の妻なり別た人の娘なり必らず婦  
 女を携へざるを得ず故は男子よして五十名の出席員あれば女子も亦  
 た必らず五十名の出席員あり既は各五十名の出席員あれば女子の豫  
 て準備したる一室は入り二十五名づゝ分れて二列となり兩行は五十  
 脚づゝ据へたる椅子を一脚づゝ餘して坐を占むるなり坐已は定まれ  
 ば五十名の男子の列を正して兩行の間を通行し手を携へ相抱ひて俱

は舞踏せんと欲する女子の前は到りて禮を施すなり女子は瞥見して  
 我が好むところの男子なれば之は應禮して傍らに餘したる椅子は倚  
 らしむると雖ども若し嫌ふところの男子あればパツンと澄して見向き  
 もせざるなり其の有様頗る十九世紀時代の花街は行はれたる素見と  
 相似たるものあり此を以て男子の甲はハツカるれば乙は當り乙はフ  
 ッるれば丙は至り遂は數十名は當りて悉くペケはされ甚だしきよ至  
 りての我が女房はハチを喰ひ指を嚙へて引込むものあり此の時も當  
 り旦那殿の面色猿猴の尻と一般眞赤になりて怒ると雖ども亦た如何  
 ともする能はざるなり斯の如きと一回男子一過し去つて坐を得るも  
 の僅々三分の一は過ぎず乃ち相携へて他室は入る其の狀欣然として  
 鬼の首でも獲たるが如し而して未だ適遇を得ざる男子三分の二は女  
 子に代りて椅子は倚るとまた女子の如くすれば女子は更は列を正し



て兩行の男子の間を通過し自ら好むところの男子の前まで至りて禮を施すと猶ほ男子の女子に於けるがごとくす此の時、當り男子の瞥見して己が好むところの女子なれば應禮して傍らなる椅子に倚らしめ好まざる女子なればッンとすまして之をハツクの權利ありと雖も悲ひかな男子は鼻たらし多くして能く之を斷行するものなく昔な唯々諾々として手を握るを奈何せん既に男女相逢へば互ひは手を携へて他室に入り暫時休足して更ニ舞臺に登り双々相絶着して舞蹈する有様の宛も痴蝶の花は狂ふが如く氷肌玉骨將に接せんとして接せず妙舞巧踏忽ち重く忽ち軽くスト、ンバタ、と跳子面白し舞ふ者の夢中となり見るもの涎を流す實は是れ人間社會無上の樂事と謂ふべきなり

蓋し舞踏會の男女の交際をして親密ならしめんが爲め設けたるも

のよして男尊女卑の弊風を矯正せんとするより極めて適當の方法と思へる、なり故に男女の權利を平等均一とせんと欲するの國に於ては必らず此の技の流行あるなり人ありて曰く男女を相好むの人をして相絶着して舞踏せしむるが如きは我々頑固者流をして評せしめば極めて危ふき事と云へざるを得ず然れども舞踏會の重きも貴顯社會に流行するものなれば之が爲め荒淫に陥る如き弊害ありるべく畢竟我々が慮ふる如き事なかるべきかと予曰く或は然らん然れども間々その事なきはあらず何となれば危險貴顯と書けばあふなしと訓む

玉突の技は舞踏會と異なり女子を交ゆると稱あり蓋し此の技は男子の遊戲として女子の遊戲はあられなり最初甲乙の二人相對して玉突臺の前後に起ち甲は白乙は黒と互ひに己れの持玉を定め次は己



れの手よ合ひたる突棒を擇び其の頭よ白墨を塗るべし是ハ球よ當り  
 込らぬ爲めなり通常一勝負を六十三點とし前よ右の點數よ達したる  
 者を勝とするなり或ハ百點を以て一勝負とするにあり若し敵手よ優  
 劣あるとこの劣者よ相應の割引を與へ其の力を平均せしむるを常と  
 す又已れの持玉白と赤と中るときハ二點を得赤と赤と中るときハ三  
 點を得白と赤二個と中るときハ五點を得るなり而して中て損するまで  
 ハ何遍よても突くなり市中の玉突場よ於てハ金を賭して勝敗を試む  
 る者あれども俱樂部よ於てハ斯る卑賤の戲を爲さず稀れよ「ブランダ  
 ー」や「ビール」などの罰杯を賭すとあり此の時や一敗すれば一杯を傾け  
 數敗すれば數杯を飲みいよ「敗ていよ」醉ハ眼聲みて見當狂ひ遂  
 一醉ふて倒るものあり古語よ一敗地よ塗るとハ蓋し此の謂ひならん

世界人種博覽會

凡そ博覽會なるものハ技藝工作等ハ關する其國の名産便利の器械古  
 物奇品を集め之を一大厦の内よ排列して五六ヶ月の間諸人の觀覽よ  
 供し世界萬國の人をして其國の工藝技術を一目瞭然たらしむるもの  
 なり蓋し博覽會の主意たる素と相違ハ相學ハ互ひよ他の所長を取て  
 己の利と爲すものよして之を譬へハ智力工夫の交易を行ふが如し又  
 各國古今の品物を見れば其の國の沿革風俗人物の智愚をも察知すべ  
 きが故よ愚者ハ自から勵み智者ハ自から戒め以て世の文明を助くる  
 と少なからざるなり今我邦ハ行ゆる、ところの世界人種博覽會ハ其  
 の主意之よ異ルリ世界萬國の人種を一の大厦よ集め開化平開未開等  
 各種の風俗を一目の下よ知らしむべきものなり十九世紀の時代よ方  
 り米國よ於て日本人種博覽會を開設し日本貴族士族平民等の狀態を  
 寫し衆人の觀覽よ供したるとありしと雖も素より香具師が營利の



爲め開設したるものなるに依り大に我邦の營譽を傷けたりと今や我邦も開設したる世界人種博覽會營利の爲めに行ふものにあらずして野蠻人を誘導して開明の域に進ましめむが爲め設けたるものなり故に歐米諸邦の人種を首めとし彼の野蠻なるエチオピック人種に至るまで凡そ五大洲の人類擧げて一堂に在り故に一たび此の堂を過れば一目して各國人種の風俗及び開化の進度等を見るを得べし而して各國人種の動作の各々其の保管人ありて之を誘解するなり二十世紀及び此の會を開くと既に三回而して毎日場に入るもの概ね六七萬人毎會一の如し是を以て都下人民の此の會の開設を望むと大旱の雲霓も帝ならず蓋し都下の繁昌を助くるもの是より甚だしきものなればなり

會場の練瓦を以て築造し構内の廣さ大約二里四方ばかり正面に時

計臺を安置し高さ二十三メートルに達す時を報ずるの聲の鏘々として四五里の外に聞ゆ前門の世界人種博覽會と大書したる扁額を懸け又各國の國旗を掲げたり門に入り數十段の石階を上り場に入れ其内を分つて數百と爲し國を由て區を畫し業を由て部を分てり然れども一々之を記したらんは爲め數百部の冊子を成せしに至るべし故に其の中の感すべきもの驚くべきもの笑ふべきもの恐るべきものを探ひ之を左に掲ぐ場に入り凡そ五六十歩許り往きし處に中亞米利加之部と大書したる木あり其の中は練瓦を以て圓形に疊みあげたる小家ありて内は四十前後の婦女口は何事かを唱へ頻りに禮拜するを見る衣服の耶蘇教師の法服に似て非なるものなり少しく胸部及び背部を露出し其の色澤黒人にあらず白人にあらず一種奇態の色を帯びたり傍らに保管人あり之を説明して曰く抑も此の女は中亞米利加



の土人と此の土地より出稼する黒人と交通して擧げたる混台人種であります。夙く夫より別れ生計に差支へて餘議なく同國より有名なる或る尼院より入りこした元來羅馬カトリック教を信仰致します。女故再縁して善き夫を持たんと只今神を祈誓する牀で御座ります。更歩むれば家屋の藤幹を用ひて造り椰子葉を以て屋蓋と爲し其の構造質は鄙陋を免かれず男女各一人簷下より在りて頻りに薪を折り之を束ぬるもの、如し男女の裸躰にして腰部を纒み掩のみ色木だ黒して黒人の如し保管人之を説明して曰く此處より居ります男女二人の中亞米利加洲の内ギニアチャラの土人が此の地の名産染木を束ぬる牀で御座ります。此の地の元來地震の甚だしき處で御座りますして千七百七十三年より全部を崩壊せし程なれば之を防がんが爲め家屋は樓を設くるを致し、せぬ野蠻の土地より相違ありませんが建築法などより可なり進

歩したる國柄で御坐います。右折して西班牙之部より入れば狹隘不潔の人家の前より凡そ十間計り二列の並樹あり幹の細長く直立して杉の如く枝少く葉の芭蕉に似て較や小あり樹下より男女の黒人五六名あり其の中二名の男の上部よりセピロの「チヨツキ」を被より足より猿股引の如きものを穿ちて靴を穿たず各々蕉口の如きものを懸り支へて天の一方を瞰め居れり一人の女の半ば上部の肌膚を露らし小兒を抱ひて乳を吞ませ又一人の女の蕃薯を容れたる籠を頭より載せて傍より起ち其の悲宛かも淺草公園に見る生人形の如し保管人傍らより在り之を説明して曰く抑も此の所の西班牙國の屬地にて西印度キューバ島の風俗を示したるもので御坐ります。人家の前より二列の樹木を植へます。此の島より傳へる古來よりの習慣で御坐ります。二人の男の此の島の土人にて是より耕作より出んとし晴



雨を考へ居る様で御坐りまほ小兒は乳を吞まする女の一名の男の妻  
 よて始めて持ちし子なれば之を愛し餘念なき體で御坐ります此方よ  
 起て籠を頭よ載せたる女の今一人の男の妻よて是より蕃署をハッ  
 ナは持行き間屋に賣拂んとする所で御坐ります  
 更よ歩を進めて行くと十五六歩南亞米利加の部よ出でたり此の處の  
 最も驚くべき境界よして死人及び死馬の白骨累々として山を作し殆  
 んと陰涯なるが如し紙製の群鴉骸骨をつひむ有様眞よ迫りて物凄  
 し毛織の合羽の如きものを着し馬よ跨りたる旅人跡の者五六名南西  
 の方よ向つて行く地上砂深くして殆んど馬腹よ達する所あり其の困  
 難名状をべからず保管人之を解釋して曰く此處の南亞米利加の大陸  
 よ於る三大平原の二「パムマス」平原の有様を寫したもので御坐りまほ  
 東部より西部よ行かんとせば是非とも通行せねばならぬ所でありま

すが元來數百里の大砂漠ゆゑ旅人の必らず馬よ乗りて旅行致します  
 馬も途中足を休むるの暇なくして數百里を行くとて御坐りますれば  
 半ばの達する能はせして斃れます馬已よ斃るれば人も大概の斃れま  
 す今此よ現しました白骨累々たる有様の即ち其の慘狀を示したもので  
 御坐ります

是より左折すれば此の處もまた南亞米利加洲之部あり旅客と覺しき  
 者六名身よの洋和混合の如き衣服を纏ひ足よ靴を穿たず中よ獵銃を  
 携へたる者二名あり孰れも木綿織の大なる袋を地上よ置きて之よ倚  
 り又の枕して眠れる者あり起返りて欠伸する者あり樹木鬱葱として  
 四面暗淡たり月繼かよ東方よ出で、光りを樹陰よ洩らせれば紙製の大  
 蝠蝠忽ち群集し來りて旅客の生血を吸へんとするの狀なり一人の旅  
 客驚き覺めて獵銃を裝ひ一發放てば其音よ恐れけん蝠蝠のみな樹陰



は飛び去り其の影を見ず保管人之に説明して曰く此の處ハ南亞米利  
 加洲の内ゴイアナ山中の躰で御坐ります極めて偏士よて數百里の間  
 更ハ人家あければ旅人の糧を携へ數日間露宿して旅行致ます然ハ此  
 の山中ハ大さ八類ハ等しき大蝙蝠が居りまして夜間人の宿を  
 知れば其の集り來ると幾百なるを知らず往々生血を吸取られて死す  
 る者が御坐います此の大蝙蝠ハ實ハ猛獁の性ある者よて啗ハ人類の  
 生血を吸取するのみならず他の動物の生血をも吸取致します故ハ此  
 の山中を往來する旅人の大概用意の獵銃を携へて居りまはが何分  
 數日の至數十日の旅行なれば其の間ハ非常の疲勞を來し知らず識  
 らず熱して用意の獵銃も其の用を爲さぬ事が御坐ります即ち此ハ  
 現ハしました旅客熱腫の躰ハ之を戒しむる爲めであります  
 次ハ到れば此の處も南亞米利加洲の内なり深く地を掘り大河の躰を

示す水上一奇船あり一名の水主と六名の水夫とを載せたり船ハ木製  
 として形水仙桶の如く之ハ丸太を以て圓形の屋蓋を造れり水主ハ白  
 き服を着け山形の帽を載きて船尾の平かなる所ハ立ち梶を取れり六  
 名の水夫ハ孰れも裸躰よて陰部を掩はず掉を取て船を行れり保管人  
 之を説明して曰く此の處ハ南亞米利加洲の内「コロムピヤ」の船乗が旅  
 客を乗せて「オリノコ」河を通行する處で御坐ります船尾ハ立て梶を採  
 るものハ此の船の水主よて掉を取る六名ハ水夫で御坐ります裸躰よ  
 て陰部を包まぬハ開明國人の眼ハ太だ視惡さやうハ思ハれますが  
 此の國の土人の古來よりの習慣よて更ハ怪しむ者ハ御坐りませぬ  
 次ハ「コロムピヤ」山中の景なり樹木鬱忽として日光を遮斷し晝間と雖  
 とも暗夜ハ異ならず一人の獵師銃を提げ起て四面を顧視するとき只  
 だ看る一頭の蟒蛇草を分けて出づ長さ二丈許り巨眼二面の鱗を並べ



たるが如く紅の舌を吐き獵師を目かけて逐ふ獵師泰然として毫も畏懼せず徐るよ身を左方へ避け覗ひを定めて銃を放てば巨蛇聲も應じて倒れ人をして思はず愉快の聲を發せしむ此の時保管人の鹿瓜らしき顔附を爲し之を説明して曰く抑も此の巨蛇は「コロムピヤ」の山中に産し實は猛毒の性を有つものであります故に獵師の如き深く山中に入るものへ往々巨蛇の爲め生命を取らるゝ事が御座りませ此の獵師は幸ひよして紙製の蟒蛇を逢ひましたゆゑ斯く容易に撃止めました次の「ウエチジュラ」の風俗なり「コロムピヤ」の東に在り土地の面積七万二千零七十六方里あり我が日本より廣きと三倍餘にして人口は其の二十分の一に及ばず土人はやあらん三十前後の色黒き婦人裸躰にて縋かゝ陰部を蓋ひ夜中提灯を照らし湖水の畔り至れば風なくして水面波を起し忽然現れ出づる者あり之を見るに鱒魚あり婦人大に狼

狽し措くところを知らず此の時鱒魚は陸上へ匍ひ上り首を擡げ巨口を開てワングリ婦人の左腕を噛み附け婦人の面色土の如くアレと連呼すると二三聲鱒魚已に左腕を噛て又右腕及び遂にヌルと水中へ引入れたり保管人の曰く此の婦人の「ウエチジュラ」の土人某の妻にて夜中「マラカイボ」の湖畔を通行し鱒魚の爲め害されました彼様なる事へ同地へ於て屢々有る事にて珍らしからぬ事でありませが東洋諸邦へ於て餘り聞かざる事あれば此の會場へ取仕組み御覽へ入れます又此の地方は電鱒と申すものが御座りますが是は鱒魚より一層猛毒の性ありて稍や大なるもの至る電氣を發し馬を退縮せしむる事が御座ります今日御覽へ入れました鱒魚は電氣の作用を以て其の軀を動かすものにて決して眞物でありません皆さん御安心なさりませ



次の同じく南亞米利加洲の内「エクトール」の風俗よて土人未鋤を採て  
 由甫を耕やす有様なり保管人之を説明して曰く抑「エクトール」の一  
 年よ冬夏の二候あり十二月より五月よ至るまでを冬とし六月より十  
 一月よ至るまでを夏と致します冬其の氣候溫暖よて人躰よ相違致  
 します夏其の烈風多くして雨を見るも甚だ稀れ御座います去りな  
 がら其の首都「クイト」よ至れば春夏秋冬の別御座りません一年三百  
 六十五日氣候同一よて常よ春の如く何れの時よ小麥を播種して皆  
 亦能く成熟致します昨今盛夏の候でありますが機械的作用を以て  
 其の氣候を春よし小麥を蒔附くる躰よ御座ります  
 是等の風俗を一觀し了りて更よ一町あまを往けば亞細亞洲之部と  
 大書したる標木を建てたり陋隘なる茅屋あり前よ男女各二人蹲居せ  
 り一人の男ハ花紋の衣を服し耳よ銀環を穿ち刀劍を帯び又一人ハ荒

布の窄袖を着し弓箭を携へたり女の共よ小鏡を胸よ掛け同じく荒布  
 の窄袖を身よ纏へり花紋の衣を服したる男ハ靴を穿てる餘の男女  
 三人ハ孰れも被髪跣足よして且つ左衽あり殊よ髭鬚眉毛深きが故よ  
 其の狀貌甚だ雄悍なり保管人之れを説明して曰く是ハ北海道の「アイ  
 ノ」で御座りまも日本内地の種属と同様よハ相違なければ言語全く異  
 なり且つ鹽漱沐浴と云ふ事を致しませぬ殊よ生業上よ大差異ありて  
 「アイノ」ハ粒食を用ひバ常よ魚腊獸肉を以て食用と致しませも今花紋の  
 衣を服し居る男ハ「アイノ」の首長よて餘の三人ハ皆な土人でありませ  
 此の土地ハ寒威極めて甚しきゆゑ夏月の此處よ現ハしたる如き茅屋  
 よ住居致しますが冬月の必らず土中よ穴居して暖氣を取るを常と致  
 します彼様な有様なれば固より野蠻頑愚よして各人ハ姓名なく又た  
 鍛練の術を知らず唯だ酒と煙草を嗜み酔ふて踏舞するを無上の快樂



とする程なれど他邦の野蠻人の如く殺戮を好まず風俗甚だ質朴よし  
 て自から禮讓あり又長者を貴び部落中の舊家酋長を世襲し總乙名と  
 の稱し次いで總小使乙名等の名稱がは坐ります  
 次は至れば極めて陋獷ある小屋の中は男女二人あり男は頭髮を剃去  
 し頂上は少許を遺して辮髪とあし之を背後に垂る女は身軀の割合は  
 足小にして其形馬蹄の如く殆んど歩行すべからず室内は在り往々轉  
 倒するを見る保管人之を説明して曰く是は支那國の風俗であります  
 男子の頭髮を豚尾の如くしたるは昔時蒙古より成吉思汗と申す蓋世  
 の英雄が荒れ出しまして明朝を撃亡ばし從來の風俗を一變して蒙古  
 風を改ため其の頭髮を剃落して少許を存したので御坐ります又女子  
 の足の小にして歩行は艱むは幼より紫着して之を大ならしめざるが  
 爲めであります此の國の女子が足の小なるを貴ぶは猶ほ歐米諸州の

婦人が髻の大あるを貴ぶと同様でありますが其賢愚に至りては同日  
 の論でいありません又貴族は爪の長きを貴び蓄へて寸餘に至らしむ  
 る者があります是れは或る國は於て鬚を貴ぶと同様の理窟で御坐り  
 ませう

此の處より更に數十歩を進め右折すれば地を堀り水を引きて一大河  
 の光景を裝置す水上は數多の船舶を浮べ人民之は住居するもの、如  
 し保管人之を説明して曰く此の處は支那廣東河船居の景を示したる  
 もので御坐りませう元來此の邊は水上は船居する人民頗る多く之が  
 爲め用ふる所の船舶は大小四萬も御坐りませう大ある者十三間餘  
 船内を數室は別ち甚だ廣闊なるものが御坐ります去れば各船孰れも  
 儼然たる一家にて啻だは閩族奴婢を使役するのみならず花卉樹竹よ  
 り鶏犬豕羊に至るまで一の備はらざる者なき程で御坐ります又往來



よの小舟を列ね道路を作りまして傍らに百貨を鬻ぐ店もあり現に一  
 大市街を爲して居ります此の船居の人口に幾んど三十萬人もありま  
 して水上に生れ水上に死し終身陸地を踏まざるもの幾萬人あるか知  
 れず誠は奇怪なる處で御坐ります去れど此の風俗に支那に珍らし  
 からぬ事にて後印度にも諸所あると聞きました  
 次の砂を布きて沙漠の風を装ひ氈帳を張りて家屋に代へ内は掃髮の  
 土人五六名あり鍋を釣して下は火を燃き鍋中の下物を食しつゝ酒を  
 飲む有様なり保管人之を説明して曰く此處の外蒙古の部落を寫した  
 もので御坐ります此土地に「ゴビ」の大沙漠は續きて瘠土のみなれば  
 耕作すべき地少く土人の水洲を逐て轉徙し實に隣れ敢果なき土地  
 で御坐ります今世の氈帳の中は居ります土人の孰れも慍悍無頼の者  
 にて烈寒を凌ぐ爲め鮮酪を飲み下物として馬肉を食する躰は御坐り

ます

其の傍を見れば壯大なる寺院あり圓頂の僧族二三十名其の中は居て  
 讀經する聲喧しし寺院の周圍は群集する老若男女之は調子を合也  
 ヤ、ハ、ソ、ヤ、ソと唱ふる聲四隣に響き人耳を聳せしめんとす此の時  
 寺院の中より金蘭の法衣を着けたる一名の僧三名の下僕を従へ出來  
 れば老弱男女皆な地は拜伏して敬禮を行ふ伴の僧の之を見向させ  
 ず塵垢らしく門外に出で去れり保管人之を説明して曰く此處に「チハ  
 ヲ」の風俗を示したものであります此の國は亞細亞州中最も佛教の  
 盛んに行はるゝ處にて國內の人口大平僧侶で御坐ります寺院堂宇甚  
 だ多く其の大なるに至りては一寺にて三千乃至四千の僧侶を養ふも  
 のがあります去れば蒙古人の此の土地を地と唱へて千里を遠しと  
 せず來つて順拜せるが常で御坐ります又此の國は「タライマ」と申



す法王が有りまして城内に君臨し土人の之を彌陀の示現せる活佛として敬ひ畏みまを之に次で尙ほ數名の貴重なる坊主が有りまを是等の者が外に出るとき市井の老弱地を伏して敬禮せざれば嚴刑に處すと云ふ規則が御坐りまを只今寺院より出で來りたる坊さんよ老弱の敬禮したのに彼様な譯あるが故で御坐りまを又山林湖水の中は堂宇を設け之を女僧を任せしむる例が御坐りますが是に大方ダイコトと云ふものにて男僧の法徳より成佛せるものと聞きました元來此の土地の壯麗なる寺院堂塔及び廣大なる彌陀堂が御坐りまして其中の無數の佛像金銀寶玉などが充溢して居りま殊に法王の宮殿の如きの巨大の一寺院にして結構壯觀華美を極め無數の佛堂高塔林立して内外に羅列し皆を金銀珠玉を鏤りぬめ燦々として人目を眩惑す大凡世界中此の如く財寶を佛寺僧侶に擲つ土地の御坐りますまい

又その傍らに一劃をなし木製の小屋に三人の男子豚尾を頭は巻附け振腕して喧嘩するを一人の女子中に入りて之を止め居れり保管人之を説明して曰くチベットに他邦に於て未だ曾て聞かざる習慣が御坐りまして兄弟數人にて一婦を娶り共之を妻と致すことが出來ます只今此處に居ります三男の兄弟にて一婦を娶りましたが次男が美男ゆゑ婦に常に次男のみ眷戀し他の二男を省りみざるより屢に兄弟喧嘩を致します今日の喧嘩も矢張り其事より起つたものと見えます次に至れば曠漠の原野あり樹木なく川流稀なり旅人跡のもの二名數十名の兵隊を隨へ原野の中を旅行す一日して野蠻の境界なるを知るべし保管人之を説明して曰く是に西比利亞の西南キルギス沙漠旅行の跡で御坐ります此の邊の土人の鞆鞆の種風で御坐りまして遊牧を業とし未だ政治の行届かざる場所ゆゑ中よの盜賊を業とし旅客を劫



掠し或ハ勾引して之を賣奴とし近隣ニ鬻ぐ者が御坐ります故ハ此の邊を通行するハ兵隊を護衛ニ附けませねバ如何なる困難に逢ふヤも計りがたしとして只今旅行する二名の旅客ハ數十名の兵隊を隨へて居ります

次ハ桴上ニ家屋を作り人民其の内ニ浮居せり其の風俗を見るハ最も卑陋ニして半身を裸ニし歩行跣足を常トす男女み亦前頭より頂ニ達して僅カニ斷髮を存し兩鬢よりして後部を剃去す口唇赤黒ニして甚だ清潔ならず保管者之を説明して曰ク此處ハ暹羅國の風俗を示したものであります桴を浮べたるハ湄南ニ在る大河まで其の中ハ終歲水上ニ浮居ず者が御坐います此の邊の氣候ハ極めて温暖ゆる安南と同じく半身を裸ニ致します又男女ニ係らず跣足ニて歩行するハ習慣トは云へ能く怪我をせぬものであります此の國ハ煙草のなき代り

ハ檳榔の實を嚼むを普通ト致しますが口唇の赤黒色を帯ふるハ之原因だと申します又此の國ハ象が澤山居りますゆゑ之を用ひて諸物を運搬し或ハ騎乗して戰鬥の用ニ供し或ハ野獸を獵し其の他種々の用ニ充つると宛がら日本人の馬を使ふやうなれど形の大なる爲め時ニ依りて困る事があるをうです  
次ハ裸躰の男女田圃ニ出で、耕作する有様なり男女色黒くして黒奴ニ異ならず陰部を露出し毫も耻ぢざるもの、如し保管者之を説明して曰ク此の處ハ緬甸土人の風俗を寫したものであります此の邊の土人ハ平生裸躰を常とし衣服を着る事が少座りません是ハ天然ニ從ふやうにも意入れませんが野蠻頑愚ニして廉耻を知らざるが故であります又此の國の人民ハ頗る佛教を尊信致しまして貴族だの僧侶だのハ勝手我儘をなし人民を蛆虫の如く取扱ひます又其の法律の如きハ太



だ嚴刻で傍坐いまして國王の名を呼び或の之を書くことを禁ます若し  
 誤つて犯す者の殘忍酷烈の死刑に處すとか申し歐米諸邦に於て夢想  
 する能はざる風俗でありませう  
 次は皮膚赭黒色を帯びたる一人の婦人あり薪を積んで火を放ち其の  
 骸々と燃上るを見て累り合掌し履べ之に投せんとして躊躇し潜然  
 として涙を流すの状なり保管者之を解釋して曰く此の女の印度土人  
 の寡婦にて平生婆羅門教を信するものでありまもが二三日前夫と死  
 別れ悲しみの餘り火中へ投じて殉死せんとする有様で御坐います古  
 來此の國に奇怪なる陋習がありまして自から其の身体を苦しめ食  
 を断ち痛を忍び以て冥福を祈るものが御坐ります最も甚だしきに至  
 りまして神佛の像を載せたる靈車と申すものがありまして此の車  
 の輒下へ挽かれて極死し或は我が子女を犠牲として之を「ガンヂス」河

へ投じ鰐魚の餌食として死後の幸福を祈る者が御座ります誠は殘忍  
 愚愚の風習にて文明國人の夢想する能はざるものであります畢竟ツ  
 マラヤ宗教を以て餘り凝り固まりますと此様な結果となります此の  
 邊に彼様を馬鹿者の叢窟故昔時英吉利人の爲め國を奪はれ今での  
 英國の領地であります去れば同政府に斯る陋習を洗除せんと履べ八  
 釜しく云ひ聞かせましても固と開化は程遠き人民なれば其の理窟の  
 分らぬに實は嘆かしの事でありませんか  
 之は次で一大市場あり數十名のほだか虫(黒奴あらん)身の黒きと墨も  
 て塗りたるが如く眼のみ光りたるは不動尊かと思違ふばかり五人六  
 人宛諸所を徘徊せり又衣服を着けたる商人跡の男其の中は混り居て  
 ほだか虫の身体骨格を驗査し二十弗乃至五六十弗にて之を賣買する  
 と大根人參の市場は異ならず保管者之を解釋して曰く是れは「ホツカ



ラ一の市街に在る奴隸賣買所であります此の近傍の土人にて自ら生計を圖る能はざる者の大概此の市場に出で、身を白哲人に賣渡し其の奴隸となるので御座います今で政府が人身賣買を禁じましたゆゑ公然賣買せる能はず斯く大道中を歩きながら行ひます殊に中央政府より數百里の山海を隔てた土地で御座いますから思ふやうに政令も行き届かず今日に至りても尙ほ彼様な有様との嘆かひしき事で御座ります去りながら之を買って使役する白哲人種の重も本國に在るとゆゑ政府が實際之を禁せんとならば買ふ者を嚴罰するやうに致し度ものであります

次の沙漠の光景あり土人駱駝を駕して其の中を旅行す駱駝に其の牀甚だ大なるが故に一頭にして十餘名の土人と諸多の器物とを載せ旅人の概ね磁器を携へ居れり蓋し曠濶成沙漠にして道路は標的を爲す

べき物なきに因り磁針を案じ星斗を指點して方向を定むるならん保管者之を解釋して曰く此處に亞拉比亞内地旅行の景であります此の邊の一面の大沙漠でありますして耕作すべき田地なき故土人の水草のある地を求めて四方に轉居し中よりの盜賊を業とし旅人を掠むるものが御坐ります只今駱駝に乗て行く土人は是より何處へか轉居する覺醒で出掛けたものや平素家屋の代りを使用する帳幕及び家内眷屬残らず乗つて居ります此の土地は於て牛馬を使はず殊に駱駝を使ひますの沙漠の中の乾燥せし爲め數日水も乏しく他の獸類もての逆も堪ゆべからざるが故で御坐ります土人が駱駝を目して沙漠中の舟と云ひますの當然の評と思はれます

次は居ります此の國の名産なる駿馬と騾馬で御坐ります此の騾馬は他邦の騾馬と違ひ其形甚だ大きく從て力もあり且敏捷で御坐り



ます他邦の驛馬の性質鈍なるが故世人常之を迂遠の者の譬へと  
 致しませしが此の地方に於ては敏捷なる人を指して驛馬の如しと申し  
 ます人類が馬鹿にて獸類が利口とい珍らしき土地柄であります  
 次の焦熱地獄の惨状を示したもので御坐います浮屠氏の未來に地獄  
 ありと説きましたたが此の國に現世に地獄が御坐ります土地の名に  
 「マスケット」と申しまして随分貿易なども盛んな處であります  
 世界中極熱第一の土地にて樹木など少しもありません六七月の候に日  
 光市街に反射して百度より百二十度達し人獸共焦熱地獄に陥り  
 しと同様の苦しみであります去れば國人に此の土地を指して地獄と  
 申しまして土人が裸躰で居りますは野蠻とい云へ一ツは衣服の必  
 要を感せぬ故で御坐りませう  
 更に左折すれば面貌醜惡の土人五名あり皆な裸躰跣足にして腰間

樹皮又の少許の荒布を被ふて陰部を秘し二人の弓矢を携さへ三人の  
 刀劍を帯び各々腰間人の頭顱を附着せり傍ら一の茅舎あり屋上  
 或の簷下は數十個の人頭を置けり其の惨状人をして見よ忍びざらし  
 む保管者之を解釋して曰く此の處に和蘭領印度セラム島土人の風俗  
 で御坐います土人の兇暴殘忍にして常殺戮を好み野蠻の中最も開  
 化に遠きもの今でも人肉を食します今腕間下げたる頭顱に現  
 旅谷を屠りたる証據であります又屋上簷下等に置く頭顱に家屋の修  
 飾に用ひ數の多きを尊ぶさうで御坐ります旅客に此等の害を恐れま  
 して内地を跋涉するに非常の用意を致すさうです  
 漸やく歩を進め行くとい町許にして一の會場あり白哲人と銅色人  
 と混じて凡そ三十名許り男女相抱き妙に足躰子をとりに舞々舞踏  
 するもの、如し保管人之を解釋して曰く此處は阿弗利加西方の海濱



に方々「シーラ、リオチ」なる英國殖民地の人民が舞踏會を開きたる有様で御坐います此の殖民地の千七百八十七年と初めて開きました其の頃の土人を輕侮するに極めて甚だしき故黑白兩人種の入混りて舞踏する姿の思ひも寄りぬ事でありました近來土人も稍や開化の域に進みまして白哲人種と一堂に會し相概して接吻を行ふやうになりましたの眞は双方の爲め賀すべき事であります  
次の四人の黒奴網にて制したる乗物は白哲人を載せ之を四ツンとして頭上と載せ旅行する有様なり保管者之を説明して曰く是も亦「シーラ、リオチ」なる英國殖民地の風俗を寫したもので御座います此の邊の未開の土地ゆゑ瀛車、馬車等の設けなく旅行の甚だ不便の處であります夫ゆゑ土人の網にて乗物を造り旅人を乗せて生計を營む者がありまます此も現しましたの即ち歐羅巴人を載せて旅行する處で御坐

います日本などで總て物を扱ふは肩を用ひますが此の土人の頭上にて擔ぎます野蠻盲味にて腦髓の貴重なるを知らぬので有ませう是より行くと町餘として壯麗なる一小都會と出でたり眼を擧げて其の標札を見れば歐羅巴の部と大書せり四面石を以て疊み上部の圓形と塗遣し更は日光を見ず諸所は氣燈を點じて全市街を照らせり諸多の肆店左右は羅列し傍らに鐵道ありて瀛車の往來甚だ繁し保管者之を解釋して曰く此の處は歐洲第一の大都會英京倫敦の市中を横斷する「テーム」河底を穿ちて開きたる陸道街の光景で御坐います「テーム」河の船舶の往來繁く濫りて橋梁を架すとき之を妨ぐるゆゑ餘儀なく河底を穿つて道路を開きました去りながら極めて巧みと開鑿せしゆゑ一見して人造の思われません況して其の頭上は大河流れ數百噸の船舶が往來するとの其の地は行かざるものゆゑも信じがたき



有様で御坐います。

又往くと數町にして壯觀美麗なる一大都會も出でたり其の屋宇は都て高峻にして五層六層或は七八層も至れり多くの皆大石を以て之を重疊し清潔峻麗尽さる所なく且つ一望一式にして他邦の市街のごとく高低新舊相錯雜せず保管者之を説明して曰く是は佛國巴里の光景でありまゝ其の家屋の下層は概ね貧人の肆店も屬し二層三層は多く富有の人の住居となり夫より上は又た卑賤のもの、住居であります此の都府は英京倫敦も較べますと稍や狹隘のやうで、有まざるが其實は都府の上は數層の都府を重ねたと同様にて倫敦より一層大なる都府で御坐います又酒舗食店遊戯場等の盛んなるは實は他邦も比類なく畢竟奢侈の風習は倫敦などの逆も及びぬ處であります之を形容致しますれば士女みな麗艶の衣服を競ひ車馬の靚裝をつくし歌宴舞

場夜を以て日は繼ぎ金衣玉食實は世界の富貴人間の快樂を極めたる土地と謂ふも誣言で、御坐りませぬ故に歌舞管絃飲食等の事に至りましては歐米諸邦何れも皆な此の國を模範として羨慕致します殊は婦人の衣裳帽子など一たび此の土地は新様のもの、流行するを見れば先を競ふて之を摸倣すると、是は東京の流行物を各地に於て摸倣するが如く流石傲慢なる英國すら此の一事に於ては何時も一步を譲りませぬ

次に至れば山水の美景實は筆紙も尽すべからざるものなり人家丘陵も跨りて高低參差を爲し市街清潔にして高樓大廈大道を狹み且つ處々も寛濶の地多く巨大の銅像銅標等あり殿宇巍峨として適美觀るべきもの多く又市街の中全く玻璃を以て蔽ひたる處あり雨雪の日と雖も道路一溜滴を受けずして往來するを得べし左右は三四層の家



屋敷を並べ金銀細工絹帛錦織百貨を鬻ぎて宛かも軒房の如く行人絡  
 繹として織るが如し保管者之を解釋して曰此の處ハ佛國の都府フテ  
 ツセックと申し王宮及び「マシエラ」寺等の美觀とありて歐州中美麗都  
 府の一つであります市街を玻璃を以て蔽ひましたハ「センロニールト」  
 街と申し實地を御覽さされた御方ハ御承知であります中々此様  
 なものでハ御坐いません去れば歐羅巴人ハ此の土地を稱してハ小巴  
 里と申します人間の生活ハ極めて活潑にして他の土地の如く乞食な  
 るハ一人も居りません  
 往くとまた數町西班牙の部ハ出でたり看來れば廣濶なる場面ハ一大  
 觀場あり圓形の回廊を設け看客此の中に充満す既にして歩卒一頭の  
 牛を曳て場内ハ入來れり次で騎馬或ハ徒歩したる人物十名許り入來  
 り一人牛の後ハ廻り其の臂ハ一鞭を加へ大聲を發して叱咤すれば牛

ハ驚き疾走す二名の騎馬武者鎗をひねつて之ハ向ひ歩卒棍棒を揮つ  
 て之を撃てバ看々狂奔して東西ハ荒れ廻れりやがて騎馬武者が突出  
 す鎗ハ一二ヶ所の傷を被ふるや否や角を揮つて馬腹を貫き或ハ人命  
 を損せり其の危險言ふべからず人牛己ハ傷き流血淋漓たり此の時五  
 六名一度ハ進み終ハ牛を斃せバ群集手を拍つて賞賛し場中爲めハ震  
 動せり保管者之を解釋して曰く是ハ西班牙ハ於て有名なる闘牛の遊  
 戯であります是ハ他邦ハ稀れなる遊戯にて實ハ危險極まりなきもの  
 でありますが此の國人ハ貴賤上下男女老幼の別なく之を好み宛も狂  
 人の如き有様で御坐います故ハ牛を殺すと一日ハ八九頭より十餘頭  
 ハ及び最も盛んなる場所ハ至れば一週間百頭を殺すを以て通例と致  
 します此の遊戯ハ古代希臘羅馬の頃ハ盛んハ行ハれたものであり  
 ましたが社會の漸やく開運するの隨ハ諸邦之を禁制し方今此の國の



外メキシコは於て流行致しませんが他邦人の目より見れば如何なる次第にて斯の如き事が面白きか其の旨趣を解す事が出来ませぬ又此の國の管法歌舞を好むの風習が御坐いまして都鄙上下の別なく遊戯の一事に至りては實に他邦に超絶して巧妙なるものが御坐ります去りあがら決して稱賛をべき事でありませぬ

次の極めて矮小なる人類快鹿を役して田圃を耕やすの有様あり人種の支那地方の土人と大差なく黄土色を帯び其の風俗一見して野蠻頑愚を知る保管者之を解説して曰く此の土地は那威の内にて「ラナラ」トと稱する處であります氣候沮寒にして耕種すべき地少なく殊に冬月の全く夜國とあり晝間と雖も燈火を要するやうななりませぬ故に土人冬月の穴居し夏月の帳幕を張りて其の中は住居し皆な快鹿を牧して生活を營みます故に快鹿は此の地は缺くべからざるの家畜にて

若し此の物なければ斯る沮寒の地は於て生活すべき道は御坐りませぬ殊に快鹿を牧しますと別段水草のある地を要せず況んや木皮及び雪中の蘚苔を以て其食と致しますまた此の獸は能く氷雪の上を奔りまして橇車を牽き少しも疲勞する事が御坐りませぬ又其の肉や乳を以て人類の食料と致し皮を以て衣を製し骨を以て器具を造る等日用の須要一切此の獸に頼ります快鹿は實に迷惑な土地に生れたもので有ます人類も智慧が進みませぬと政府の爲めは此の快鹿と同様な目よ逢ひます亞細亞や亞非利加の人々の御用心さつしやりませう

往くと更し七八町忽ち一大都會の水面上は浮島を見る行くところ陸地なく行人皆な舟を以て往來す正に是れ水を以て道路とし舟を以て車よ代ふるもの、如し保管者之を説明して曰く此處は伊太利の首府「ウエニス」の光景で御坐ります此の府は元と無數の島嶼を合せて開設し



更に許多の溝渠を鑿通したるゆゑ縦横の街衢に残らず水流とありま  
した故に俄かよ之を見れば全府水上に浮ぶかと怪まれます支那地方  
よの舟や桴を住居とし終身陸地を見ざる者ありとか聞きますが此の  
府に住む人民の中にも終身田園園林を見ずして世を歿する者があり  
ます

次に至れば身は濫褻を纏ひたる乞食風の人類六七名地上に偃臥して  
空談するが如き有様を見る保管者之を解説して曰く此の處の「チー  
ルス」の風俗を寫したもので御坐います元來此の土地の氣候温暖とし  
て飢野多く實は西洲の樂土とも申すべき程結構な土地で御坐います  
が何分無學文盲の人民多く怠惰にして生業を理めず寝たり起きたり  
してツマラヲナク日を暮すもの、みゆへ益す貧窶に陥り殆んど貧乏人  
を以て國を充たすといふ有様になりました是は原因が二ツありま

して一は此の國革命前政府が嚴酷の法律を設けて民權を束縛し絶へ  
て開化を進ましめざりしに依り一は天然の美國にて人民心を衣食住  
に勞せず安全な生活し得べきに依るので有ます世は彼様を國が役  
々あるもので御坐いますから他國の事と思はれませんぞ

西洋手品

今より大凡四百年前葡萄牙人「ピント」ト云ふもの初めて我邦に來り  
其の翌年より商船を送り長崎及び九州の地方に於て貿易を開けり次  
で同國の宣教師來り民間に「クリスチャン」宗「耶穌教」なりを廣めたり  
慶長年間に至り又英吉利和蘭の商船來り通商を爲せしむツリスチャ  
ン「宗」の門徒次第に民間に蔓延せしより賊徒之を煽動して亂を作し終  
は寛永の末年に至り九州島原の役あり「天草一揆」と稱するもの是れな  
り是に於て葡萄牙人を逐ひ奪ら「和蘭支那」兩國の商船のみ長崎に於て



通商を許したり爾後我が國民の頑愚なるクリスチャン宗を以て魔法  
 を使ふものと爲し不可思議ある手品でも爲すものあれば直ち之を  
 以て吉利支丹クリスチャンの誤音なりと云ひ之を忌むと毒蛇猛獸よ  
 りも甚だし畜し當時我邦の野蠻未開の土地ありしを以て舊教の僧徒  
 等宗旨を擴めんが爲め勉めて不可思議なる事を爲し以て人民を籠  
 絡せんと試みたるならん而して幕府の之を逐ふも當りても人民は嫌  
 厭の心を生せしめんが爲め態と吉利支丹の魔法なりと稱したるも  
 や果して然らば是れ一時の政策も出で己を得ざるものといへ人民  
 をして世は魔法ありと信せしめたるの實も愚と謂はざるを得ず維新  
 以來制度文物大に開け人智やうやく發達するも及びても尙は不可思  
 議なるものを指して吉利支丹と云ひ西洋手品師が器械的作用を以  
 て巧妙なる手品を爲せば之を以て直ち魔法と呼ぶに至る然れども

現世の人智は十九紀時代の人智と同年を以て論ずべからず十九世紀  
 時代は不可思議と爲し、ものゝ今世の乃ち陳腐は屬し三尺の童子と  
 雖とも能く其の理を知る故も藝は流行したる日本手品の如きは全く  
 其の跡を絶ち今に即ち高尚なる西洋手品のみとなれり故も大道の豆  
 藏もまた電氣機械の一臺位なければ以て人の耳目を喜ばすも足らざ  
 るなり

目今都下は流行する所の西洋手品の磁器電氣機械反射術等を以て種  
 々なる變象を現はすも在り譬へば今日倫敦巴里桑港等も興行する  
 芝居なり觀物あり將た其の日の出來事なり之を其の日の中も寫出し  
 て看客も示し又は三間の一室も一町の一大ホテルを構造して其内よ  
 り數千人の旅客を出し或は看客を居ながら一大漁船も乗組ましむる  
 が如し其の奇其の妙殆んど言語も絶へたり蓋し是等の技術の究理學



の彌々進歩するに至らば殆んど兒戯に類し更に不可思議の事あり  
らざるべしと雖も若し之を十九世紀時代の頑生をして評せしめば  
果して何と云はん此の現世の吉利支丹の魔道は墮落したりと云ふ  
ならん

西洋手品の興行は午後一時より同五時まで一回同六時三十分より十  
時三十分まで一回都て一日二回となす又興行場へ從來の寄席の如く  
狹隘にして且つ粗造ならず練瓦若くは石を以て之を築き狂言場を一  
方は置き三方を觀覽場は供す日々の狂言新規ならざるのなく皆を眼  
を驚かすは足る又一ヶ所の興行場にて十名乃至二十名の手品師あり  
交々たる技藝を演す其中一人の統領あり最後は至り得意の反射術  
若くは電氣術を演し之を以て一回の終結と爲す猶ほ舊時の寄席の  
し客場は満ち前坐技を演じ了れば統領場は出で客は謂て曰く只今取

仕組まする手品の一曲は昨今英國倫敦に於て興行中ある回教の開祖  
「マホメット」の芝居は御坐ります手品の儀で御坐りますればお目まだ  
なき段の幾重も御用捨を願ひますと旨畢りて椅子は倚れば數十名  
の小廂等樂屋の中より出來り豫て備へたる管聽器假聲を聴く器械を  
衆客の中央は持出したる此の間絶へず奏樂あり已にして統領椅子を  
離れ一喝叫んで正面の緋幕を切て落せば只だ看る倫敦市中の一大劇  
場を現出せり舞臺の結構頗る壯麗にして眼を驚かし觀客凡そ一萬バ  
かり喧騒の聲は勿論俳優の假言は至るまで詳かき聞くを得ると現は  
其の場は臨んで實見すると一般の想ひあり正面は黒地の法服を纏ひ  
椅子は倚りたる「マホメット」なり歩卒跡の者凡そ五十名ばかり左右  
は居並ぶを見返りつゝ汝等の我が宗教に歸服したるの甚だ感すべき  
となれど「マヤナ」の中よりまだ歸服せざるもの半ばは過ぐ今の詮方な



ければ兵力を以て服従せしめん初陣の血祭りも三四名の悪徒(猶太教)及び耶蘇教を信するものを指して云ふを捕縛し來れよと命じければ皆な同意もハッ承知仕りましたと云ふより早く其の中の十名ばかりスツクと起ち下手をさして這入る引違へて花道の方より五六名の土人一名の土人を高手小手も縛り上げ吏來りてマホメットの前も來り一同拜謝して一人進み出で申しあげます此の者の猶太教の信者もて法王(マホメット)をさして云ふの教へを悪しさまも申し觸らすとの事より捕縛致し連發りて候如何處分いたすべきや御差圖を願ひ上ますと云へバマホメットの莞爾と笑み太儀〜只今血祭りを爲さんとて悪徒驅りよまいッたあと好き獲物の來る間其奴を屠りて樂まんソレと左右も眠くませすれば五六名の歩卒大刀提さけでばら〜と進み寄り甲汝ハ猶太教の信者よな乙勿躰なくも我が法王の教へも背き

愚民を感へる大罪人丙慈悲を以て御前も於て丁首刎ぬるもより一同「覺悟致せ引と云ふより早く一人の歩卒玉散るばかりの刃引抜き丁と細首打落せばマホメットの喜びしげは打微笑み何さま心地よき事ぢやな引と是もて幕手品師の統領ハ衆客も對ひ是ハ目今倫敦の劇場も於て評判高き回教の宗祖マホメットが己れの教へも従はざる者ハ腕力を以て従はしめしと試みたる有様で御坐ります諸君若し不審しく思召さば倫敦劇場も電信を發し今月今日の何時頃も如何なる狂言を演せしかを問ひ玉へ必らずマホメット擧兵の場を演したりと答ふるでありますと云ひ了りて退場す看客其の奇も驚かざるなし願ふも是等の技術ハ十九世紀の時代も於てハ夢想もだも及ばざる所のものなりしが人智の開達に隨ひ遂も之を以て普通一般の手品となし市井の間も流行するも及べり人智の進歩もまた偉大なりといふべし



社會の變遷は隨ひ事物もまた盛衰あり昨日まで珍奇と稱せられしもの今日頗る聲價を墮して路傍の馬矢と一般人の省みざるものあり今日必要を感ずるものも明日俄か不必要となるなきを保たず十九世紀の時代よりわたり我邦に於て頗る繁昌を極めたるは外國語學校なり當時英語を學ぶもの最も多く東京市中至るところに英語學校の設けあり之より次ぐものを獨逸語と爲し其の數英語學校の半に居る佛語學之より次ぎ魯西亞語最も少なしと雖も尙ほ百を以て算ふべし蓋し當時内地雜居を許し世界萬國の人種俄然内地に充滿せしを以て之と交通するに於て頗る困難を極めたるに由るなり然れども現二十世紀に至り此等の語學は殆んど一般の通語となり凡そ我が邦人にして片言交りの英語くらひを解せざる者なきに至りしかば復た他邦の語學

を學ぶの必要を感ずるとなく遂に盛衰地を異にして却つて日本語學校の繁昌を見るに至れり蓋し我邦二十世紀の新天地に殆んど世界萬國の商業競争場と一變し他邦人の來往櫛の齒を挽くが如く外國漁船の纜を東京灣に解くもの日百を以て數ふべく之より由て新たに渡來するもの亦た其の幾何なるを知るべからず新たに渡來するもの我邦の事情は暗くまた我邦の言語は通せざるもの甚だ多し我が邦人已に彼の邦人の言語を解すと雖も彼れ我が言語を解せず又我が文字を知らざれば之が爲め生ずるところの損益果して如何ぞや之を喻ふれば猶ほ車夫の符牒のことにしやリカント云へば十錢なりフリカント云へば二十錢なり然れども普通の人之を知るもの稀なるが故に爲めよきやらるゝと往々よして之あり英吉利人にして日本語を知らざるものもまた然りイチと云へばワンの事なりニと云へばツロの事なり



り然れともイチのワンたり二のツにたるを知らざるものゝ之が爲め  
 意外の間違を惹起すことあり是れ實に然自の道理に出来るものとして  
 日本語學校の繁昌を極むるの誠、偶熱にあらざるなり  
 日本語學を教授するの學校として東京府下にあるもの無慮三百三十  
 三校、就中最も大なるものを日本語學校となし日本橋の畔に在り元  
 と魚市場のありし處結構壯大巍然として蒼穹に聳へ生徒の惣數凡て  
 一萬人に垂んとせり日本神商及び外國商人の有志金に依て設立せし  
 ものなりといふ抑も此の校の主意とするところは極めて簡便なる方  
 法を以て普通語學を教授するに在り第一いろは四十七文字の書方及  
 び發意を教へ第二片假名よて五十音濁音及び半濁音を教へしへ第三重  
 音及び綴字法を教へしへ次は單語連語等を漸次におしへ導びくものな  
 り左に其の圖角を掲げて示すべし但し五十音の圖のいろは圖とさし

て變る所なければ省く

いろは圖

せ	み	あ	け	の	あ	た	る	へ	い
se	mi	a	ke	no	na	ta	ru	he	i
す	し	さ	ふ	ね	ら	れ	を	と	ろ
su	si	sa	fu	vo	ra	re	o	to	ro
	ゑ	き	こ	く	む	そ	わ	ち	は
	we	ki	ko	ku	mu	so	va	chi	ha
	ひ	ゆ	に	や	う	つ	か	り	に
	hi	yu	e	ya	u	tsu	ka	ri	ni
	も	め	て	ま	み	ね	よ	ぬ	ほ
	mo	me	te	ma	vi	ne	yo	nu	ho



濁音 及 半濁音 之 圖				
ガ	バ	ダ	ザ	ガ
ga	ba	da	za	ga
ギ	ビ	ジ	ズ	ギ
gi	bi	ji	zu	gi
グ	ブ	ズ	ズ	グ
gu	bu	zu	zu	gu
ゲ	ベ	デ	ゼ	ゲ
ge	be	de	ze	ge
ゴ	ボ	ド	ゾ	ゴ
go	bo	do	zo	go

教師鞭むちを採りいろは圖を指し衆生徒しゆせいとに示して曰く「イローロハニエー  
 ホーヘートー」衆生徒「イローロハニエー」教師「最初のイの字  
 の母音であります英字のアイと同じ字であります夫からロハニホへ  
 トといふの皆な子音と云ひまして英字を二個づゝ、合せて一つの字を  
 形造ります即ち母音の之を單音たんおんと申し子音の之を重音じゆうおんと申します」教  
 師の更またに傍かたわららなる五十音の圖を指示して曰く「アイイウエエー  
 ナー」

衆生徒「アイイウエエー」教師「即ち此の五個の文字が母音であり  
 ますアハ英字のエーで御座いますしてイハ只今申したアイと同じこと  
 です夫それからウハエーは通じエハイ、ナハ矢張やはりナーで御座います皆  
 さん分りましたか」衆生徒「ワカリマシヤ」  
 教師またいろは圖を指して曰く「いろは」の「い」の字と「う」の「の」の字と  
 發音の同じ事でありませうが「い」の字ハ單音たんおんの字ハ重音じゆうおんでありますか  
 ら御注意なさいませうし即ち「い」の字ハ度々申す通り英字のアイと同じ事  
 で御座いまするが「の」の字の方ハ「ブ」ナリと「アイ」と二個合せたものであり  
 ます又「を」わか「の」をの字と「れ」くやま「の」の字ハ同様で御座います即ち  
 をハ英字のオーと通じ「ブ」ナリと「オー」と二字綴り合せたものが「の」の字  
 で御座います又「こ」えて「の」の字と「る」ひも「の」の字も其の如く「は」ハ英  
 字のイーと通じまするが「る」の字ハダブル「エー」と「イー」を合せなければ通



じません皆さん是が分りましたら濁音の方よ移りませうサア讀で御覽なさい 衆生徒「ガーギーゲーギー、、、、」教師「前の二十字が濁音で後の五字が半濁音であります其の中よ同じ發音で二種の字が二個あります即ちツの字ハセットアイと綴りチの字ハシェーアイと綴ります尤もヌの字とッの字ハ何方もセットユーと綴つて差支へ御坐いません是等の課業畢りて教師ハ更よ「ポートル」よ對し白墨を採て左の三項を記し附けたり

(1) Aburglar alarm clock went off the other night without arousing the family.

It went off with burglar.

(2) What is the lowest price, for I do not like to bargain?

(3) This must be an old man, for he hasa long white beard.

教師ハ衆生徒よ對ひ右の三項を日本文よ譯すへしと命ずれば生徒ハ

孰れも用紙とペンを取出し「ポートル」よ對し思考を凝らす者あり苦もなく筆を撥くるものあり數分時間よして一字をも記せざるものあり筆を投じて嘆息するものあり千狀萬態一々名狀すべからず既よして定限の時間至る教師生徒を促して曰く「サア出來たものハお出しなさい是よ於て稿成らざるもの過半々々の生徒教師の面前よ譯文を持出し畢るや否教師ハ又も「ポートル」よ對ひ白墨を採て左の譯文を記しつけたり

(1) 盜賊を拒む爲めの眼覚し時計が或る夜家族を起さず何れへか行きたれば其の行衛を尋ねたるよ盜賊と共に欠落したり

(2) 私ハ直切るのハ嫌いですお前の方でギリ／＼結着の直段を幾何よしますか

(3) タシカ老人でありませう何故と云へば彼の人よハ長さ白い鬚が







りて始めて東洋に現出したる新國と云ふべし此を以て我々の貴邦の國語を學ぶと貴邦人の我邦語を學ぶより遅れたる曰く實に貴説の如くんは日本語學校の繁昌に實に我邦の繁昌を表するものか遂に辭して去る此の事一時の談語に過ぎずと雖も又以て他邦人が我が邦を敬重するを証するに足るべし願ふに十九世紀の時代は方りて我が國人歐米の諸邦を尊重すると宗教家の「キリスト」に於るが如く歐米人とすら云ひ、學問智識共に秀絶するもの、如くは思ひ洋行すら爲さば忽ち大學者と爲るを得べしと心得居たり是を以て蟹行書の一ニペーも讀み得るもの、忽ち倣面を爲して社會を聘曉し天狗鼻をおやかして青雲の上を復伴せり今に即ち然らず歐米人の我邦に渡來して我が邦語を學ぶこと猶ほ昔時我邦人が外國に渡行して外國の學校に入らしがごとく殆んど彼我の勢を轉倒したる者と謂ふ可し嗚呼また盛

なるかな

内外婦人慈善會

近年種々の會世に流行し其の數千を以て算すべし曰く國會曰く府縣會曰く區町村會曰く美人共進會曰く博覽會曰く競馬會曰く競漕會曰く擊劍會曰く娛愉會曰く法縲の會曰く何曰く何而して内外婦人慈善會の國利民福を増進するの主意に由でしものよて最も世人の喝采を博し社會に非常の勢力を有するものなり此の會に現二十世紀に及んで始めて勃興したるものよて外國の婦人及び我邦の婦人が共に協力して組織したるに依り内外婦人慈善會と名けしなり十九世紀の時代は在りては貴婦人慈善會なるものあり其の組織稍や此の會と同じかりしも其の目的に至りて大に異なるところあり乃ち貴婦人慈善會の貧民救助を以て其の目的となすがゆゑに其の利益に重なる養育院若



くの有志共立病院等へ施與したりき然るは本會の之は異なり敢て貧民を救助せんとを爲さず世の工藝其の他諸種の發明を爲すも資本なきが爲め其の志を達する能はざるものを救助するを以て目的とせり蓋し貧民の世間限りなきものなり一々之を救ふんと欲すれば毎年巨萬の財を費さざるを得ず貴婦人慈善會の舉美の即ち美なりと雖も毎年春秋二期數千金を以て一部の貧者を救ふは過ぎず其の恩澤日本全國の貧者及びざるを以て美舉の美舉たる所以を知るもの甚だ稀なり且つ夫れ世の貧民は二種あり一は意苦地なきか又は放蕩無類にして自ら貧に陥るもの二は幾多の不幸に際會し己を得ずして貧に陥るもの是あり第一種類のもの固より之を救はずして可なり第二種類のもの之を救はざるべからずと雖も多數の貧者中此の二種類を區別するは云ふべくして行ふべからざるの難事たり殊に貧民

なるもの重んず處世の道を知らず所謂社會の無用物なるを以て之を放恤するの効は幾か一人の歡心を買ふは過ぎずして更は世を益することなかるべし故に内外婦人慈善會は貧民を救助するの誠無用なるを知り其資を以て更は國利民福を増進すべき事業を企てしもの、志望を達せしめん事を目的とせり其の開會は毎年春秋二期と定め下谷佐竹の原なる日本俱樂部若くは山下門内の俱樂部を以て其の會場を充つる事とせり

會場の前門は國旗及び諸外國の國旗を處狭きまを建て列ね門を入れば廣園の中央は一大木柱を建て其の頭上より數十條の繩を蛛網状に張り之は數千の紅燈を懸下したり園の左方は花崗石を以て臺を築き其の上は丈餘の銅像あり是れ前大宰相千崎彌五郎公の尙像なり其の傍らに假小屋を設け帷幕を繞らし其の内にてダンス、チャンピオン、



チンの音あるの海軍樂隊の樂を奏するなり歩して階を上れば樓上樓  
 下一面は花紋の洋氈を布きつめ左右二列は數百の新店を開けり其の  
 種類を算すれば曰く西洋小間物曰く亞細亞銘酒曰く櫻田ビール曰く  
 箱根唐木細工曰く世界一品ハンケチ曰く東髪道具曰く新發明女  
 服引曰く美人化粧道具曰く伊太利製珈琲曰く日本風水茶屋曰く英吉  
 利風一せんめし曰く何曰く何之を賣るもの皆な貴婦人なり十五六處女  
 あり二十四五の令闈あり四五十のお婆さんあり皆一様は面を並べ西  
 洋と日本とお龜と別嬪と和洋混淆醜美一ならず此の日此の場に入來  
 るもの其の察見とお客さまとを論せず皆な是れ三十錢の茲善家な  
 る切符料三十錢を出さざれば入場を許さず紳士あり商人あり美人あ  
 りお多福あり堂々たる官員方些々たる平民衆陸續踵を接し其混雜の  
 鎮守のお祭りの如く其足音の北國の雷公の如し娘チヤ柳澤の殿様が

入らつしやいましてお母さんアノ帽子を御覽に入れ下さい母今日  
 の好うこそお出かけなさりましたサア澤山お買ひ下さりませ殿此の  
 帽子の幾何上げたら宜しひ娘五圓でお掛直のないどころです殿イヤ  
 是の私の頭へのはまらぬモソツト大きなのが好しひ娘夫でん其の方  
 は若さまの遊ばしませ殿さまのお頭は是が宜しう御坐います殿  
 「大きな方の幾何ですな娘双方で十二圓は致して置ます殿少し高くな  
 りませんか娘市中でお買遊ばすより三割方お高う御坐います殿是  
 で取て貰ひませう娘ハイ二十圓で御坐いますかおツリハ明日お届け  
 申します様を下れば二八の可憐兒五六名水茶屋を開き道を遮り袖  
 を捉へて容易は通行を許さず口々と呼べるやうナア皆さん寄て  
 お出なさい珈琲もありますお茶も出來ます或る紳士眼尻を下げ三階  
 で澤山呑んで來たから放して下され少女二階ばかり可愛がらす下



をも可愛がつて下さいまし 紳士 忌味を云ひれて困る咖啡を一抔貰らませう 傍らなる西洋の菓子店も數名の美人ありて執れる手も一折づゝの菓子を持ち行人よす、むるやうに折僅か二十錢お歸りのお土産にお買なさい此の時二十六七の生意氣風の人物ステッキをふり廻しながら來かゝるを認め 美人 アノ人よ賣てやりませうカステロールさん(西洋婦人の名なり)つかまへて下さいな カス 貴郎お菓子買てお出なさい 男 私お菓子嫌いです 美人 貴郎お嫌いなら御令息のお土産よなさりませ 男 わたしの子供を持ません 美人 お子供衆があければお隣りのばつちやんよお遣りなさい 男 隣りよもありません 美人 ソンナラ御親類のお子供衆よお遣りなさい 男 困ったな幾何です 美人 十折ばかりお買ひなされるか 男 其様よ入りません 美人 十折で僅か二圓でそよ男の泣き出しさうな顔附よてソソナラ十折買ませう持切れなくつて困

つたナア抑も慈善會の婦人の貴顯紳士の令嬢令閨なり未だ商業學校に入りて商業の淵奥を極めしものあらざるなり未だ商家よ養はれて十年の年季を勤めたるものあらざるなり然るも其商賣の熟練にして且つ巧みなるも斯の如し亦た驚嘆の至りと謂ふべし無有居士曾て貴婦人慈善會の狂詩あり以て証となす

山下門西霞關東練瓦高樓聳青空此是有名鹿鳴館(今俱樂部是也)

慈善會場在此中手製品々々狹迄陳列摸樣與市同奥方姫君腕掛絢賣附容牀中々工洋服打扮程太宜白襟難樂日本風不負不劣梅與櫻宛是春園花一鏡就中二八可憐兒捉客史袖顏散楓可笑紳士下眼尻頻見取難爲素通乍去此催施興資節辛世中無量功嗚乎夫人慈善既如此奮發勿負主人公

慈善會の毎會三日間之を開く近年大に隆盛となり三日間の賣高無慮







事は托して之を中等に逐下するが如き所爲あり是等の悪弊は十九世紀時代の西洋諸國に流行せしものにして素より我國に於ては夢想もだも見る能はざる所のものなり蓋し米人の尙ほ未だ此の弊を脱せず往々人よ由て殊別の待遇を爲すとあるを以て竟し我が邦人の爲めは聲價を奪はれしなり

「ホテル」は大小あり室は醜美あり而して位は上中下の三等あり上中の二等は相知るものよあらざるよりは一室一客を以て定規となす獨り下等に至りては相知らざるものと雖も一室數客を容るゝを常とせ故にまた種々の悪弊あり某旅店の一室は客五名あり二名の日本人よして同行のものなり三名の外國人よしてまた同行のものなり二人の本人の外國人を見て頻りに密話し居たるが其中の一人外國人よ向ひ英語よて云へるや貴君方にお見受申せば遠國の御様子ぢやが何國

からお出でなさりました外私共は南亞米利加「ブラゼル」のもので御坐います日ソレは六層御遠方ですが何か御商法よでもお出掛けですか外イヤ別は商法と云ふ解でいありません近頃日本の中々景氣よく金の儲かるよ於ては世界第一の土地だと云ふと故三人申合せ渡航しました日成程ソレは御奮機ぢやイヤ自分の國を賞めるぢやありませんが何よ致せ方今日の出の國ですから金の儲かるよ於ては日本よ越す國にありませやい併し貴君方の何の御商法です洋服屋さんかソレトモ靴かシャツのやうなものですか外ナニ是と謂つて資本の入るやうな商賣でいありません日「イヤ資本の入らぬ商賣」ドロでいあるまいしハテナ何が御商賣です外ナニ資本が入らぬ譯でいありませむ入るとい入りますすが勞力といふ資本です日「ハ、ア成程勞力といふ資本ですか是は恐れ入った併し勞力も必要です近頃日本でい大概の



事ハ機械的の作用で出来るやうなツたので自然勞力の價直に下落  
 を來し之を擯斥すると益す甚だしきを以て勞力は衣食するもの漸く  
 其の數を減じ今日となりては却て勞力は欠乏を告げた有様ですから  
 貴君がたの商賣の受合ッて繁昌を致します併し差向き勞力を賣込ま  
 ると云ふ目的があります外何々まだ今朝東東灣へ着した計りですが  
 ら當あんずの少しもあいのです日ハ、ア左様ですか私共ハ信州飯田  
 のものですが近頃勞役者の少ないハ困ッて居ます貴君方がお出な  
 さると身軀ハ壯健だし力ハありさうだし随分割の善い給料が取れま  
 す外其様を善い所なら往て見度ものですが少しばかり學問をする餘  
 暇がありますか日アルトモ、餘暇の幾何でもあります其の土地  
 ハ日本一等學問の盛んな土地だけありて學問の爲めなら主人の客ま  
 す時間を與へます外ソレハ結構なところですよ如何いふ人の手續を經

たら左様な處へ參られませう日別ハ手續といふものハありませんお  
 望みなら私共がお約束申しても又他へお世話申しても宜しひと聞て  
 外國人等ハ善色満面は溢れ外左様なら三人とも願ひ度ものですが日  
 宜しむお約束申しませうと是より日本人二人ハ日本語にて何事をか  
 相談し再び外國人ハ對ひ日我々が力役者を雇ふハ一年極め二年極め  
 三年極め五年極め十年と云ふとがありまして少くとも一年の契約を  
 結ばされハ雇ふとのならぬ規則はなッて居ますが貴君方ハ何年間の  
 契約をなさります外我々の少くとも五ヶ年間の日本ハ滞在する心得  
 で渡來しましたから仕事の模様はより五ヶ年間の契約を爲すも差支  
 へまありません去りながらまだ不案内の事ゆゑ最初一年間の契約を致  
 したひものですが就てハ賃銀の割合ハ如何なものでてりませう日賃  
 銀ハ一年間なれば一時間八錢、二年間なれば八錢五厘、三年間なれば



九錢といふ如き割合故十年の契約なれば随分巨額の金を餘して歸國が出来ます外ソレヲ食料の何ういふ勘定となります日食料は毎日二十錢づゝ其の中で引去りますが是の一月六圓ですから僅かなものです外成程其様な割合なれば旨ひ話しちや早速願ひ度もので一日宜しひ受合ひました二三日滞在して用事の済み次第歸郷しますから其の節御同伴致しませう

以上の日本の悪漢が欺言を以て不知案内の外國人を騙惑するの手段なり是より悪漢の二三年乃至六七年極めを以て外國人を雇ひ入れ食料の外種々の名義を以て入費を引去るを以て外國人の雇錢を得るも之を餘す能はざるのみならず動もすれば不足を生ずるに至れり而して之を使役すると猶ほ古昔歐米人が亞弗利加の奴隸を使役したるが如く残忍酷薄至らざるなし外國人の其の無情を怒ると雖とも既に亘多

の負債あるを以て如何とも爲す能はず徒ら西天を睨め恨を呑むて使役せらるゝの状ハ恰も十九世紀時代は於る娼妓が樓主の酷待を受くるも出脱の計なく唯々として願使せられたるが如し蓋し外國人はして是等の酷待を被ふるもの南亞米利加印度亞非利加等は於る野蠻人は外ならず歐米人の我邦は渡來する者太だ多しと雖も斯の如き陥穽は墮落し日本人の酷待を被ふるが如き者あらざるハ文明開化の徳と謂ふべきのみ然れども無智文盲として救済を辨せざる者を憐むと爲さず却て之をして陥穽に墮落せしむるが如きに至りては寧ろ無智文盲ある野蠻人の所行は劣るものと謂ふべし今日の日本文明開化を謂ふと雖も斯の如き悪漢の地を掃ふにあらずんば即ち眞成なる文明開化と稱するを得ざるなり噫

美人共進會



共進會の事物の改良進歩を謀る爲め設くるものなり蓋し共進會繪畫共進會の類是なり古來共進會の數頗る多く人の珍奇を感ずるもの太だ少なしと雖も特り美人共進會に至りて古今未曾有の珍奇と謂ふべきなり夫れ美人との容姿の美を云ふなるか抑もまた行爲の美を云ふなる乎若し容姿の美を云ふとせば内心如夜刃を如何せんまた行爲の美を云ふとせば一朝一夕の共進會を以て之を看破し易からざるを奈何せん斯く相像し來らば余の美人共進會の目的を知るあたざるあり或人曰く美人との敢て容姿の美を云ふはあらず又行爲の美を云ふはあらず容姿と行爲と兩ながら全きものを云ふなり然れども斯の如き美人の容易は得る能はざるべし故に美人共進會の美人の單は顔面の美を取り敢て内心の醜美を論せざるあり而して其の目的は美男美女の配遇を均一にし遂に美ある子孫を擧げて我邦の人種を改良せし

めんと欲するに在りと果して其の目的を達し得べきや否を知らずと雖も願ふは此の會の世上好奇の人情に適當するに過ぎずして擧る社會に益なきものと信するなり其の方法の如き左の規則書を抜記して之を示さん

第一條 本會の天下の美人を擧げて一所に集むるを目的と爲す但し十五歳以上二十歳未満にして未婚のものに限るすし

第二條 本會は出席せんと欲する者の最初寫眞は住所姓名年齢等を書添へ之を本會に差出すべし本會は於ては五名以上の審査委員立會のうへ之を檢査し適當と認むるもののみ其旨通知すべし

第三條 本會の許諾を経て會場は出席したる者の之を本會の會員と爲し名簿に記名捺印せしむ

第四條 本會の金盃銀盃銅章賞狀等を製し之を出席の美人に賞與し



金盃及び銀盃を得たるものハ掛員協議の上名譽會員と爲す可ある  
べし

第五條 本會出席員ハ天然の美を競ふを目的と爲すが故ニ殊ニ紅粉  
美服を以て裝飾を加ふるを得ず但し會場ニ列席する時ハ本會制規  
の衣服を貸與すべし

第六條 男子ニして會員の姿色を愛し之を妻ニ望むものあらバ住所  
姓名年齢財産負債の有無等を明記し之を本會掛員ニ申出づべし掛  
員ハ豫め其の適否如何を審査し然る后女子ニ照會し又ハ婚姻を媒  
介する可あるべし

第七條 如何ある美人と雖も一旦藝妓となり或ハ私窩子を爲した  
る者ハ會員とあるを得ず又破廉耻罪を犯し法律の處分を受けたる  
者も同じ

第八條 美人ハ重もニ容貌の美を取り敢て精神の如何ニ關せずと雖  
も師範學校中學校大學校等の卒業免狀を所持するか又ハ之ニ相  
當の學力を有するものハ特ニ名譽賞盃を與ヘ天下公衆ニ示すべし  
第九條 本會々員となりし後破廉耻の處行を爲し又ハ其罪を犯した  
る者ハ之を除名し其の理由を記して之を十種以内の新聞紙ニ廣告  
すべし

以上の規則ハ其の概略ニ過ぎずと雖も要するニ美人共進會ハ此の  
規則ニ由りて成立ししものなり按ずるニ第一條十五歳以上廿歳未滿  
ニして未嫁のものニ限るべしとあるハ再婚者の出場を豫防し且つ處  
女の淑徳を保護したるものにて最も注意の適當を得たるものと謂ふべ  
し第二條最初寫眞ニ住所姓名云々とあるハ多福ヘナチヨコノ醜面  
を以て萬一を僥倖し別嬪社會の仲間入りを爲さんとするが如き圖太



き連中の出席を防禦する爲なり其の五名以上の審査委員立會のうへ云々とあるの豫め寫眞を以て別品か不別品かを審査するに在り故に寫眞面の善きもの往々僥倖を博するとあれど出場のうへ賞盃を得る能はず却て赤恥を曝すとあらん第四條の賞盃賞狀等の事を記せり思ふに金盃を受くるもの一等美人銀盃を受くるもの二等美人銅章を受くるもの三等美人賞狀を受くるもの四等美人と謂つて可ならんか第五條紅粉美服を以て裝飾を逞ふせしめざるに本會の最も注意したるものにて我輩の至極賛成する所なり第六條の觀覽人の男子として出席の美人を見染めたる時の取扱ひ方なりヒヨットコメンチの田舎漢が富豪の處女やセントルメンのお嬢様を見染め徒ら煩惱心を發する時之をして斷念せしめんが爲め引導を渡すを以て本條の目的と爲すが如し然れともキ出し之を云ふに餘り色氣なき

を以て掛員に於て一應之を受附け然る後臨機應變の口上を以てハチ附けるなり第八條學校の卒業免狀を所持するもの名譽賞盃を與ふるに教育を誘起するの好方便にて至極面白し第九條新聞廣告の事頗る残酷に似たれとも實に女子の淑徳を保護するものなり面貌に至極美麗なるも其の内心鬼神阿松一步を譲らざる者世上何を限らん此の如き莫逆者を矯正せしむ固より非常の手段を用ひざるべからず

會場の俱樂部を以て之に充て三日間を以て開會日限と爲し入場券三十錢を以て衆庶の觀覽を許す當日の貴族のお嬢様と裏店熊公の娘とを論せず苟くも姿色ありて出席を望むもの貴賤上下の區別なく之を許可するといふを以て聞く者皆な珍事となし遠きを厭はず出京して芝口の「ホテル」に當日の來るを俟つ者多く都下の人も亦た喋々其



の奇を鳴らして殆んど狂すが如き有様なりき既では開會期日となれば早朝より俱樂部の門外は詰めかくるもの幾千人と云ふを知らず押されて轉ぶ老人あれば親まはぐれて號ぶ小兒あり押倒し突退けて先ま進む若者あれば入る能はずして躊躇する小女あり肩摩腕擊雜沓大方ならず前九時及べば既五萬餘の入場券を賣尽し場内寸地を餘さざれば門を閉ちて入場を拒絶せり亦た盛なりと謂ふべし  
 場に入れば一府若くは一縣を以て一區となし全國三府四十餘區に分てり美人の皆な一樣の洋服を着け椅子に倚りて側目もふらず居並びたるの新發明洋風の離人形とも云ふべき有様にて流石の全國より寫眞の見本を以て選り出されたる代物と知られたり然れども美人共進會へ自から好んで出席するもの吾こそ一々一等賞盃を得んと思ふ者もあらずれば能はず宜なるかな皆あ得意然として顔赤らむもの、少な

きや割合は美人の少かりしに自惚美人のみにして眞の美人の出席せざるも由るか抑もまた紅粉美服を以て其の容貌を裝飾するを許さざるも由るか孰れにしても美人共進會の名と相背きたるの惜むべき事にてありき

古來我邦人の進取の氣衆も乏しく種々の共進會を設けて之を誘起せんと誠むるもの之は出品するもの生物諷りか自惚人足のみ多く技術まれ工藝まれ眞も究理して濫奥を極めたるもの笑つて之を省みざるもの多し美人共進會の如き殊は是等の慣習を制せられたれしものと覺しく現は有名なる某紳士の令嬢某大家の處女の如き言を盡して説くものあるも更は之は應せざりき然れども平生婦女に接する事の少なき連中の涎を流し皆を垂れて其の美を驚き殆んど歸るを忘るものあり實は近時の一奇觀と云ふべきなり初日の盛況已は斯の如く



なれば二日目の一層甚だしく観客後れて入る能はざるを恐れ夜半より門外も詰めかけ入場券の賣出しを俟つもの幾千万人と云ふを知らず早く門を開けよ」と呼ぶる聲喧ひすしくして宛がら雷の如く高等法院の傍聴人が門外も集まると一般の光景なり蓋し社會の有様を見るも人類の色を以て始まり色を以て終るもの、如し故も古歌も云へるあり曰く日の本は岩戸かぐらの始めより女あちで夜の明けぬ國と願ふも美人共進會の徒らも助平連中の精神を煩悶せしめたるも過ぎずして寧ろ社會も利益なかりしを信ずるなり

亞細亞大博覽會

我邦も既に世界人種博覽會の設置あり然れども此の設けたる固と人智の進度及び風俗の如何を知るも過ぎずして未だ技藝工作諸般の發明各國の名産世界の古物奇品等を見るも足らず若し是等の事を知

らんと欲せば宜しく世界大博覽會を設置すべしと雖ども凡そ世上萬般の事漸を以て進まざるべからず故も先づ緒を我が東方亞細亞も開き而る后西方も及べんとし遂も亞細亞大博覽會の設置あり會場の先年開設したる世界人種博覽會場を修繕して之も充てたり亞細亞洲内の列國先を競ふて出品し凡そ當時世も行なれたる人稱せらるる物品ハ餘さず之を排列して幾千萬種といふを知らず實も我邦未曾有の盛舉と云ふべきなり其の園庭の光景排列の有様等ハ敢て贅せず技藝工作の精粗産物の等差等も就て論評する所あるべし

(支那)此の國ハ土地廣く人民多き割合も出品少なし然れども流石ハ古國丈けも随分珍奇の物品も富めり種々古物ある中も破れたる一片の陶器あり是ハ明の永樂年間南京も建設したる名有なる陶器の高塔を彼の長髮賊の兵發も懼り焼失したる時の碎片なり厚さ二寸許りして



一面は唐摸様あり頗る雅致を含めり今日の支那は比較すれば當代の支那の美術なども遙か優りたるものと思へる又方五尺許りの煉石あり是は秦の始皇が遼疆の外冠を防ぐが爲め東遼東山海關の海濱より西嘉峪關に至るまで長さ五百十數里の間山川を横斷して造築したる萬里の長城の煉石なり斯く理由を聞けば随分たいした物なれども俄か見れば普通一般の切石にて強ち珍物とも思へれず其の量一個は付五百貫目餘と記し附けたり遠路の出品御苦勞千萬此外珍らしきもの北京は在る皇城の瓦なるが只だ大なるのみにて評すべき程の事あく鴉片を喫する烟管なども多かりき産物の茶を第一とし絹帛磁器漆器陶器紙類玉石象牙文房器具生姜大黃彫刻の諸品等にて差したるものなく其の中山の如く積上げたるの唐紙かみ又上海天津寧波等より見るべきもの更もなく廈門は茶砂糖布帛陶器臺灣は穀

類、果物、樟腦等少々、の出品ありたり

(朝鮮)此の國極めて小國なれども肥田沃野甚だ多く殊に至る所鐵山ありて全土黄金を以て充すといふ土地柄なるは係らず其の出品は一塊の鐵物なく割合は多き人參のみ其他穀物、烟草、絹帛の類少々あり材木より見るべきもの外かりき又珍物とも云ふべきは箕子の衣冠なり是は支那古代の制なれば摸様等判然せされと兎も角眞物と相違なし中よ加藤清正の調體なるものありしが清正三面六臂ありて首一個ぐらい不用といふ云へ朝鮮はまで首を忘れて歸る筈なし是は全く同國人の法縲あらん

蒙古の差したる出品ありし土人が平生栖息する帳幕は極めて剛強なる布を以て造り如何なる風雨よても堪へ得べきと受合なり又馬肉を表る鍋と鮮酪を飲む盃は孰れも土製にて極めて粗造なり又人をして面



を背けしめたるの土人が使用する弓箭なり其の血痕斑々たるの旅人  
或の猛獸を射殺したるよ由るといふ實は野蠻蠢愚を看板に掛けたる  
ものと云ふべし「マイ〜チレ」よの出品少々あり綿布毛布皮革等を以  
て最と爲す「カタコルム」<sup>二</sup>「ドロノル」等にの見るべきもの更にあし「イリ」よ  
の名も分らぬ玉二三種あり此の土地の南崑崙山に對するを以て玉を  
出せしならん如何なる名珠か古物家の鑑定なきを以て知る由なけれ  
ど俗人の眼より見れば馬失を乾固めたるよ異ならず  
〔西に利亞〕此の國り有名なる野蠻國にして曾て魯西亞の領地となり其  
の壓制を免る能はざる程の土地柄なれば固より工藝技術などの發明  
あるべき謂れなし其の出品の如き此の會場中最下等よ居る北部土人  
の出品よかゝる桶車の木を撓め之を斧にてけずりしまゝ造りしもの  
と覺しく其の粗製名狀すべからず之を耳かきむべき伏鹿の鹿の一種

よて角甚だ大あり「ヤコーズク」の近傍より一條の繩を出品せり是の  
同地よ有名なる堅氷を緊結して出品したるよ日本同地と異なり温  
帯地なるが上よ炎暑の候をムキ出しよて運搬せしゆゑ未だ到達せざ  
るよ早く己よ融解して水と化し繩のみ残りしを出品せしといふ又同  
地出品の象牙海獅の牙其の他獸類の牙骨等ハ平素土中より掘出をも  
のよて同地輸出品の一なる由「トムスク」地方よりの熊羆豺狼孤狸麝鼠  
等を出品し又「フナツクスアイランド」地方よりの白熊海獅鯨鯨等を出  
品し「カムサツカ」地方よりの土人が平生車を牽かしめ運輸の便よ供  
する狗を出品せり此の國も産物の礦物を以て第一とし獸皮之よ次ぐ  
即ち金銀銅鉛錫汞白金及許多の寶石を出せり其の中最も驚くべきハ  
三貫目の金剛石と廿五貫目の黄金なり此の黄金ハ「アルマイ」山の金礦  
より出でしものなりといふ



安南アナンの土地豊饒ほうじょうにして産物多し然れども人民頑愚がんぐにして工藝技術の發達はつたつ亦く只だ陶器の一種に於て東洋に有名なり之を交趾燒コウチヤウといふ出品の陶器を以て第一とし其他護謨米穀肉桂砂糖鐵銀等あり製作物を見るべきものなきに甚だ惜むべき事なり

暹羅シヤムの巨大の佛像數十個の出品あり是の國王の宮殿を裝飾したるものなれどか奴隸のしめる犢鼻褌たぶんどしの茶褐色ちやくしやくにして恰も醬油しょうゆにて煮しめたるが如くなりとも決して古きにあらず主人の虐待ぎやくたい玉の汗あせを流すも汚れ目の目立ぬやう注意したるものなりとか其の他産物の銀鉛錫香木象牙犀角藤席米穀砂糖等シヤムにて別目べつめあたらしき物なし緬甸ビルマの暹羅より一層甚だしく唐木細工からこぎと麻布蜂蜜のみ多く金銀象牙の類はなはは太だ少なし

(印度)此の國の浮屠氏ふしやの本元ほんもとだけありサンスクリツサンスクリット梵字ぼんじを以て書した

る古書を出品せり此の中より深遠高妙の哲理てんえんこうめうを究めたる者少あからざれど國人の之を讀で行ふ事を知らざるもや頑愚がんぐにして俱ともに調るも足るもの少なし殊ことに此の地の産物多くして草木禽獸より金石珠玉に至るまで其の種類太だ多し此の會場は出品したるものを見るも米穀鴉片海鹽生絹木綿砂糖輕羅油硝石藍青等最も夥おほだしく礦物の鐵石炭其の他名譽の至室あり就中金剛石の出品多き眼まなこを驚かすばかりなり又ベンガル州より出品したる粟あわの實あまは夥おほだしき事ことにて殆んで一町四方ばかりを埋めたり是の支那人の好める鴉片の種子たねにてガンヤヌ河の近傍は作りしものなりとか此の地の印度中鴉片を産するも第一の場處ばうじにて毎年五千三四百萬圓の輸出あり此の内支那一國は輸送するもの十分の九なりと多實に印度の利益に支那の弊害へいがいと謂ふべきなり又ニッポールニッポールより出品したるシナモンシナモンと名くる木材の其の質



緻密にして且つ堅牢なれば船材に用ひて宜しといふ其他咖啡砂糖煙葉米穀木綿等の出品あり孰れも良品ありき

(比耳西亞)此國の出品の藥草眞珠硫磺絹帛類金銀線の織物及び諸種の菓物類あり最も不可思議なる出品の人間の乾物なるが是れ此の地よ珍らしからぬ事にて空氣清淨にして且つ乾燥なるが故に人屍敢て腐敗するとなし人腊を爲す由るといふ

東土耳其斯坦の穀類綿麻菓物銅鑛の外種々の寶石玉類を出品せり殊に天山の礦窟より發掘したる黄金の其の光輝々として眼を射るべかり此の國の物産中第一位に居るもの、如し西土耳其斯坦の出品の東土耳其斯坦及びバズと雖も金銀の類少なからず其の地動物は馬騾馬羊等ありたり此の國にて少しく眼新らしかりし彼の有名なる「タメルラン」の墳墓の石片なり往時威勢の強大なるに當りて亞細亞の

大半を併呑し歐羅巴亞非利加等を蚕食したる「タメルラン」も今や此の國の衰頹を知らば泉下にて瞑する能はざるべしと想せられ轉た感慨の情を發したりき

(亞細亞土耳其)此の國出品太だ多て就中藥品木綿烟草金屬等其の首位を占めたり「パレスチナ」の地方よりの葡萄橄欖無花果柳樹及び種々の香木菓蔬等を出品せり此の國の古國だけあり随分古物あり首府「イユルサレム」より出品せし刀劍類の半は折れたるもあり又ハ血痕は染みて腐りたるもあり一曰戰爭の際に用ひたるを知るべきものなるが是れ往時十字軍の攻入りしとき回教の兵が分捕りし戦具なりとぞ又「アラブ」より出品せし一葉の扁舟は上古大洪水のとき「ノア」の親屬が「アラ、ツト」山に逃れしとき乗りたる船なりと云へば果して然るや否信すべからず其他此の土地の出品の絹帛獸皮等にて案外見るべきも



の多し又「バグマツト」府より出品せし瓦礫の往時此の國は有名なる「パ  
ビロン」城に用ひたるものと加聞けを見たところよて「ツマラナキ」も  
の多し

〔亞拉比亞〕此の國重なる出品は駱駝、馬、牛の三種なり、穀類は乏しきゆゑ  
土人牛を採り干物となして食料と供す、首府「メツカ」及び「エーメン」等よ  
り咖啡、護謨、椰樹、草木の類を出品あり、就中少しく奇品と思はるる「マホ  
メット」が回教を信せしむる爲め制したる法律を自筆して認めたる巻  
物なり、回教を信せざるものハ死刑に處すなど自ら害惡の言を吐きち  
らし社會の害惡を除かんとせし、隨分不都合なる人物と云ふべし  
東印度諸島「ルソン」の砂糖、咖啡、木綿、藍青及び諸種の木材を出品せしが  
別は評すべき程の物少なし、瓜哇の諸島中最も豊饒なる地方だけあり  
て産物甚だ多く、穀物、果物を首めとし、咖啡、砂糖、藍青、煙草、生姜、胡椒、砂胡

椰子油等の出品あり去れど此地和蘭の所領なるを以て島人其利益を  
獲るあたはず國人の爲めは粒々辛苦の膏血を吸取せられて浮む瀬な  
きハ誠と憐れむべきなり「シユマメラ」の島中極て野蠻なれども産物甚  
だ多く金、銀、錫、鐵及び金剛石、樟腦、木膠、胡椒、椰樹、木材及び許多の香料を  
出品せり又「ボルニチ」の象牙、犀角、眞珠、玳瑁、燕窠、樟腦、顔料（染物の木）金剛  
石等を出し殊に多量の黄金を出品せり其の他「セルベス」「モルツカス」「ア  
ンポイナ」「セラム」など數十島ありて孰れも多少の出品あれば記すべき  
程のもの少なければ略して載せず又我邦の出品は金、銀、銅、鉛、鉄、石炭、穀  
類、茶、蠶糸、烟草、陶器、漆器、絹帛、其の他機械、美術品等枚擧げ暇あらずと雖  
ども看客の豫じめ知る所なれば之を略せり

### 私窩子

十九世紀の時代より公然淫を賣る者あり娼妓と稱す官之を許し爲め



法律を設けて之を保護したりき三渡世取締規則是なり今よりして  
 之を考ふれば實に不可思議千萬の事にて我々の想像の及ばざる所な  
 れども野蠻の世界に於て之を普通一般の事として毫も怪しむもの  
 なきなり當時最も繁昌を極めたるは新吉原と爲す娼妓三千あり毎夜  
 之を買ふもの一萬より下らず次は盛んなるを根津と爲す是亦二千餘の  
 娼妓あり其の他品川と云ひ新宿と云ひ千住と云ひ烟花の地總て五ヶ  
 處あり之を五花街と稱す皆な相應の繁昌を爲す二十世紀に至り政府  
 嚴に此等の花街を禁止娼妓をして皆を正業に就かしむ蓋し人身賣買  
 は開明諸邦の卑しむところ當時所謂娼妓なるものに出稼と稱し妓樓  
 は貸座敷と唱へて娼妓貸座敷は出稼するの名目なりしと雖ども娼妓  
 は現に數十圓乃至數百圓の金額を前借し其の約束の調ふと同時に妓  
 樓に寄宿して漫り外出するを許さず加之ならず前借金を拂はされ

は疾病等の事故ありとも容易に歸宅を許さざるを以て見れば實に其  
 の身を樓主に賣渡したるは異ならず二十世紀に至り政府の之を嚴禁  
 したるは誠は當然の事と謂ふべし然れども一利一害の事物の免れざ  
 る所にして政府が娼妓を嚴禁すると同時に其の反影を私窩子に及ば  
 し彼等をして意外の繁昌を致さしめしと是なり私窩子の法律の禁ず  
 るところ固より公けに之を行ふはあらずと雖ども彼等の狡猾なる巧  
 みは法網をくぐり竟に第二の烟花場を現出するに至りたり實に識者  
 の遺憾とするところなりと雖ども亦た已を得ざるの弊害と云ふべき  
 なり

東京市中至るところ私窩子のあらざるはなし而して最も盛んなるを  
 築地島原八丁堀靈岸島の近傍となす之は次々もの曰く芝烏森曰く新  
 橋曰く柳橋曰く柳原曰く四ッ谷鮫ヶ橋曰く深川木場曰く何曰く何枚擧よ



暖あらず大なるもの四五十名を養ひ小なるものと雖も尙ほ二三名を養ひざるあし就中繁昌を極むるもの三層五層の樓閣を構へ二三臺若くは六七臺の馬車ありて私窩子の白晝馬を鞭ち自ら狎客を見舞ふに至る亦た盛なりと謂ふべし往時地球上に於て最も私窩子の盛んは流行せしは英國倫敦府となす其の有様殆んど我邦は流行する私窩子の如くなりしも人智の益す發達するに隨ひ自然其の勢を減じ現二十世紀に至りては竟も全く消滅するに至れり願ふは國は破廉耻罪を犯すもの、多き間決して文明開化と稱す可らず十九世紀の時代は當り英國の如きは地球上最も文明開化の域に達せしもの、如く自らも誇り人も稱せしと雖も彼の厭ふ可く忌むべき私窩子の其の首府は充滿したるを以て見れば決して文明開化と稱す可らず今や之は異なり斯る破廉耻の處行あるもの全く其の跡を絶ち殆んど無爲よし

て化するの有様なれば是れを誠と文明開化と稱すべけれ我邦の如き十九世紀の時代は比すれば載や開明の域に進歩したるは相違なしと雖も之を要するは我が邦の現世の幾かは英國の十九世紀に達したるものと謂ひざるを得ず然れども予は私窩子の一點に於て之を謂ふにあらず天下萬般の事物皆な此の順序に出づべきを信するなり抑も私窩子は數種あり家は在りて嫖客の來るを俟つ之を上等の私窩子となし路傍は娼婆を出し客を引來るもの之を中等となし自ら路頭は立ち寸時の春を鬻ぐもの之を下等となす上中の二種の一名地獄と呼び下等の一種は「ロツパリ」或は「チヨイ」と云ふ「ロツパリ」とは自ら客を引くもの、ひよして「チヨイ」とは一寸と春を鬻ぐもの謂ひならん明治維新前より方より「ヨマカ」なるものあり「ロツパリ」と同様の手段を以て淫を鬻ぎたり明治十四五年の頃に至り此等の徒愈よ猖獗を極め夜に入れば娼



娼路傍を徘徊し行人を引くと殆んど公けは異ならず而して最も繁昌  
 を極めたるの銀座柳原等にして之が爲め行歩は艱むはとなりき官之  
 を憂ひ偵吏を派し嚴之を搜索したるを以て一時其の跡を絶つゝ至  
 りしと雖も花街の廢絶と其の處方の稍や寛大あるとよりて再び  
 猖獗を逞ふし今や東京市中の私窩子の昔時の娼妓と殆んど大差なき  
 に至りたり就中深崎洲崎根津新廓の跡仲町及び島原八丁堀築地靈岸  
 島近傍に散在する私窩子の最も驕奢を極め稍や富豪の者もあらされ  
 ば其の聘に應ずるを拒む蓋し東京灣の開けし以來此の地の内外人交  
 通の衝に當り都下最も繁華の土地となり隨て豪華を競ふもの、増加  
 したるは因るなり  
 樓も大小の別あり大なるもの西洋料理若くは旅人宿待合船宿等の  
 招牌を懸け小なるもの牛肉手輕料理安宿等の招牌を出す婦も美醜

あり美なるもの一圓乃至二三圓の玉價を食り醜なるものと雖も  
 尙十錢乃至二三十錢の玉價を受く又樓の大小を問はず媒婆をお婆さ  
 んと云ひ男女の雇人をつるとん龜とんおらめとんおたけとんと呼び  
 樓主の住居をお部屋と唱へ主人をお部屋の旦那主婦をお部屋のおか  
 みさんと呼ぶが如き昔時の妓樓と大差あるとなし私窩子の大概前  
 借金を以て身を樓主に委ぬるを常とし座敷のみを借り業を營むもの  
 は甚だ稀なり然れども其の名は純然たる雇人なるを以て之を媒介す  
 るもの即ち雇人受宿なり故に往々無瑕の婦女を欺き竟に終身を誤  
 らしむるとあり是れ此の社會の一弊となす其の前借金の如き樓の  
 大小婦の少長醜美も由て差異あり乃ち十圓以上五百圓以下を以て通  
 例となす又私窩子の食料の樓主之を辨するものあり又辨せざるもの  
 あり蓋し樓主の適宜とす凡そ此の一社會の普通の人情を以て推想す



べからざるものあり、己は前借金を以て其の身を樓主は委ねたる以上の生殺與奪の權利のすべて樓主の掌中へ歸す此を以て食を與ふると興へざると亦た樓主の胸中へ在り故にその食料を辨ずるものと雖も一日肉一片とパン三個許り過ぎず、而して最下等に至れば單にパンのみを興ふるが如く其の残酷に至らざるなし然れども此の如き傾向は恕すべし獨り彼の一片の肉一個のパンを興へざるものに至りては實に云ふに忍びざるものあるなり故に其の反響に忽ち嫖客の囊中及び一夜の春を買はんと欲せば先づ「ピフテキ」と一擲の「ビール」を散賤せざるを得ず故に車夫馬丁の如き下等社會はあらざるより、單に私窩子のみ抱きて眠るあたはず、娼女や飲食物の高價なる殆んど普通價直の三倍なるをや想ふに此等の弊害は昔時の花街より遺傳し來りたるものにて歐米諸州に於て曾て見ざるところの習俗と謂ふべし

し

大樓の私窩子に一人として一室若くは三四室の閨房を有ち一名乃至六七名の下婢を使役す其の俸給の如きは敢て樓主を煩はさず凡て自ら之を辨ず其の身元來下婢として更下婢を使役するとい此の社會の一怪事と謂ふべし下婢の給料は一月一圓内外に過ぎず然れども己に六七名を使役すれば六七圓となり之より一人四五圓の食料廿世紀に至りては食物も大に進歩せりを合算すれば毎月四五十圓を要すべし我邦に於て毎月四五十圓の生計を營まんと欲すれば中等以上の者にあらずれば能はず然るに私窩子の能く之を行ふもの抑も其の繁昌を推知するに足るべし然れども小樓の私窩子に畜ふ此の如き驕奢を極むる能はざるのみならず却て憐むべきものあり其の處世の有様を見るに第一十分の食料を得る能はざると第二寒暑を避くるに我が意



の如く爲す能はざるに第三夜中眠る能はざるに等樓主の虐待を被ふるに亞弗利加の賣奴が英人より甚だし官是等の事情を知らざるにあらざる警察の保護行届かざるにあらざる而して之を禁制する能はざるもの世道の變態にして已を得ざるものか抑も亦た別其の故あるか

樓の構造頗る奇巧を極む一棟にして其の入口を二別し一方は旅人宿たり一方は西洋小間物店たり外面より之を見れば全く別人の住居の如しと雖も内に入て之を穿鑿すれば實に一家なるものあり斯の如き旅人宿の方にて於て私窩子を養ひ若し誤て偵吏の爲め推知せられ其の闖入は逢ふとき二階より三階より咄嗟の間隣家なる西洋小間物店に遁れ入るを得べし加之ならず斯る奇巧の策を構ふものには尙ほ別は東西南北は遁避すべき間道を設け又押入戸棚等の中よ

り裏階子もまた拔道を通じたるもわりて容易に犯罪の証跡を認むる能はざるに警察官の最も憂慮する所たり審だに警察官の之を憂慮するのみならず平生其の樓に在り家内の様子を熟知するものと雖も私窩子の外に容易に之を知る能はざるを常とぞ人智の發達に従ひ建築法も亦た非常の進歩を爲し竟は是等の悪徒に其の利を與ふに至る一得一失はまた免るあたはざるもの哉

牛肉なくして牛肉の招牌ありあることなくしてあるこの招牌あり人之を暖味屋と云ふ誠は偶然にあらざるなり夜深く人静かなり掛行燈の火影忽ち明るく忽ち暗く二三名の白首私窩子の異名火桶を圍んで對坐し傍らに主婆あり煙草の煙を曲み吹き喃々何事をか説く此の時媒婆二人の客を引來り之を一室に伴ひ去る主婆之を見て聲を密めお客だよお前達居匯りなんぞして居てはいけないうお客二人とも初會



のやうだから頼も出すが今夜の外に上る客のあるまい、おたか、昨宵もお茶を挽てまた今夜もアブレるとい何たる意氣地のないことだと云ふとき媒婆入來り媒婆 お客の玉を見度と云から三人仕度をしてお出なさい 主婆 お前方今夜のお客を取損ねると明日からお飯を喫させないよ、ッシテおよしの此の間のやうにお客の前で放屁なんぞをしやうもんなら其の分よの置かないから好く心得て出るがいひ 媒婆 サア仕度が宜くの出たり〜三人神佛の加護を心よ念じ媒婆の後よ隨ひて出るさま白鬼の夜行とも云ふべく斯る醜面を以て客よ情慾を發せしめんとするの猶ほ木よ縁て魚を求むるが如し、三人室よ入るや勉めて可憐の風を粧ひ燈火よ背して順を逐て坐す客之を熟視する再三再四 甲 善く見えねへやうだ明ひ方へ顔を向けて貰ひ度ノウウ 乙 お婆さんラソアの方へ顔を向けさして呉んぬ 媒婆 ンナ耻かしがッて居るんで

すから此位で勘忍しておやんなさいな 甲 いや左様のいかねへ一夜でも女房だ氣よ入らあなけりア面白くないサ 媒婆 夫じや皆さんお嫌でも一寸と明ひ方へお向きなさい 乙 いや向た〜 甲 モー宜しひ澤山だ君氣よ入ったのがあるか 乙 左様さノウウ君の如何だ 甲 お婆さん此の外よの居ないのか 媒婆 まだ三人居るのですが生憎今夜の引て居りません 甲 其の三人の別嬪か 媒婆 ナホ、ホ、ホ、マア其様な事の後として早くお極めなさいな 乙 君の如何する氣だか僕の明日の晩來て引て居るのを買度ノウウ 甲 僕も左様仕度のだお婆さんお氣の毒だが左様しやう 媒婆 其様な事を仰しやらずと折角お出なすつたもんですから一寸と遊んでお出なさいな 甲 夫でも明夜來て見立換をするのの極りが悪いからマア今夜の歸らふノウウ君 乙 ソレ〜 明夜急度來るからお婆さん氣の毒だが 媒婆 アノお娘さん達私窩子を指すがメッ〜泣て居ま



アね可愛想だから遊んでお遣んなさいな幾何の御散財でもない二十錢宛でさアね 甲 困ったなア君遊んで往くか 乙 仕方がないからお交際をしやう 媒婆 有難う御坐います何方がお氣よ入りしました 甲 氣よもなほも入りやアしねへが始めは据ったのよしやう 乙 僕も其の次だ 媒婆 ソナラ貴君がおよしさんで此方のお方がおかめさんサアお二階へ参りませう階子を昇る音ギシバタ〜〜〜 手弱な階子ゆる〜〜

柳陰影暗きところよ警吏の眼玉を掠め行人の袖を曳くものあり之を「ロツパリ」と云ふ多くは是れ枯柳殘花白昼人の概は供すべからざるものあり五六錢乃至十四五錢を以て寸刻の春を鬻ぎ以て生活の助けと爲す 女 チョイト遊んで入らッしやいな 男 幾何だ 女 十錢ですよ 男 五錢ませけねへか 女 八錢よして置ませせう 男 夫なら止さう 女 七錢よして

置ますからお遊びなさいな 男 合ひやッて六錢で善きやア遊んで往かう 女 置いて置ませせうお錢をお出しなさい 男 後でも宜ひだらふ 女 前へお呉んなさいまし 男 疑り深ひなアと云ひながら六錢出して渡せば女は之を受取り男を誘ひ或る物揚場の材木の影に引れたり此の時女の亭主材木の此方へ附け來り張番をなせば件の女體て出來り懐中より錢を出して渡す 亭主 幾何ある 女 六錢あるよ 亭主 安かつたナア此は是れ最下等の私窩子が客を取る有様あり文明を以て誇稱する現二十世紀の世の中は斯る野蠻の處行あるべしとい實は想像の及ばざるどころあり 夜已よ三更戸々みな眠り街頭人絶へ四面閑寂たり客あり戸外に到り微よ戸を叩き云ふ お婆さんモ一寝ましたかへ戸内應じ云ふとなたで御坐います客云ふ乃公だよ何卒開けて下され主婆聲を認め忙しく袂を出で戸を開き云ふ チャ旦那大層お遅ひちやありませ



んかサアお這入んなさいまし客因て内入る主婆戸を鎖して之を後  
 樓に導びけバ客云ふ今夜お蝶さん何した家居るか子主婆云ふア  
 アモ一寝て仕舞ました今起して來ませうと起て行く體てお蝶と云へ  
 る年比二十歳ばかりの此の家の暖味女眼をこすりながら出で來りチ  
 ヤ且郡大層遅く如何おさいました客云ふ今夜芳生軒(洋食店の名なり)  
 同郷人の懇親會があつて私も出席したが此様遅くなつての家へ  
 歸つたところが芳しひ事もないゆゑ來たのだ一杯遣りたいが酒があ  
 るだらふか蝶今時分其様な事を仰つても旨ひお肴も何も出來致し  
 ません大分酔てお出なさるから今夜直にお休みなさいまし客ナル  
 ホド夫なら酒の明朝呑むとしやう寝さへすれば宜しひ此の時以前の  
 主婆來つて傍らに在り笑つて客の背を叩き云ふいつもお浮氣です子  
 一客婦隣房に至れば已に寢蓋の用意あり主婆客を拜して云ふ御ゆる

りお休みなさいましと戸を閉ちて去る是より知らず如何の事がある  
 夜色沈々只だ時器の賑る音を聞くのみ

各國端舟競漕會

端舟の競漕の海軍操練の一なり平生之を演習せざれば一朝事あるま  
 際し敵艦と相對し砲烟彈雨の下を潜りて變幻出沒の妙を顯すは不  
 便なり萬一戰破れ尻は帆かけて退くも亦た不便なり海軍々人が平  
 素之を演習するの面白半分稽古半分の二分子より成立つもの、如く  
 見ゆればも實の一所懸命あり此頃品川灣に於て開きたる各國端舟競  
 漕會の之を輕忽し觀察し去らば海軍人の遊戯に過ぎずと雖も實に  
 之に因て各國海軍の強弱を知るに足るなり  
 此の品川灣に來集したるに我邦の軍艦を首めとし英米佛魯日清の  
 各軍艦と爲す各軍艦に於ては熱れも彩旗を帆檣に懸へし端舟を下し



て軍人之よ乘込み競漕者の帽子の色を分ちて國の殊判を立て我邦の赤英國の白米國の青佛國の黄魯國の茶日耳曼の黒清國の樺等なり此の日天氣清朗にして空の一點の雲翳なく海上風もく平水かなりしかば端舟の競漕の最も適當の好日なりき見物人の御殿山及び沿岸の人家とも殆んど人山を築きたる如く立錐の地を餘さず在官在野の貴顯紳士國會議員新聞記者等も熟れも海軍省の招待によりて風月樓品川の海岸に在る俱樂部ありて充滿し是亦た寸地を餘さぬばかりなりき會場の品川停軍場内の廣地を以て之を充て入口は緑門を設け内は海軍樂隊ありて樂を奏す審査官の各國より佐尉官各一名づゝを出して審査船を乗組ましめ之を競漕場の中央に置きたり競漕距離は直行千五百二十メートル往復千四百十メートルとす此の日端舟の集りしもの無慮五百餘艘一國一舟即ち常は六艘づゝの競漕を誠むる事と爲

せり

午前九時中央の審査船より打出す一發の號砲を相國も一同船を裝ひ定め場所より到り待つ間程なく又も一發の號砲を打出すと等しく六艘の端舟の劣らじ負けじと漕出したる此のとき沿岸の見物人の一時も唱采の聲を揚げ赤勝て白勝てと呼ぶる聲の犬の喧嘩かと怪まれ御殿山の見物人亦た一齊に揚げる関の聲の宛がら百雷の一時は墮落するかと思ふばかりなり六艘の端舟は孰れも必死となりて競漕するを以て其の疾きと鉄砲玉の如く人間の業を思はれざりしが忽ち一艘の端舟六七メートルばかり漕抜けたり這は何國の舟なるぞと見物一同眼を附くれれば是なん赤帽子の日本端舟のソレ赤だぞ日本だぞ押切れ進めと聲かくるうち日本船の遙か乗切り遂は十五分時間を以て前途に達し次は英船次は魯船其餘は皆後れて十六分時間にして初め



て達するを得たり此の時一度もドツと揚げたる喝采の聲の山も動き海も鳴るばかりよて最も勇ましかりき此の如きとすべて十五番あり其の間絶へず奏樂ありて來會人の耳を樂ましめしが日本端舟の常は勝利を得たるは最も本邦人の眼を樂ましめたりき此の日海軍省より勝利を得たる各競漕者は賞金若くは賞金を與へまた英國軍艦及び米國軍艦よりの第一番并は第五番は勝利を得たる日本競漕者は賤賞を贈與されたるは皆だは其の競漕者の名譽のみならず我が海軍の名譽と謂ふべきなり

十九世紀の時代はあたり清國政府は海軍の必要を感じ之が擴張を希圖せしを以て一時大は進歩の狀を顯はしたりしが中ごろ故障ありて之が退歩を爲し今代に至り再び擴張を計るも日尙は淺きを以て未だ各國の海軍と競争を試むるは足らず此の日の競漕會は於て十五番の

中一番も勝利を得る能はざりしは實は氣の毒千萬の事と謂ふべし近時造船學大は開け軍艦の一時間三十ノットを走るを以て通例と爲す之は隨て端舟の構造も種々の奇巧を凝らし十九世紀時代の端舟と同じは論ず可らず清國の海軍甚だ不整頓と云ふと雖も其の軍艦は即ち他の文明國と同様は構造せしものなり而して其の端舟も亦た同一ならざるを得ず然るは此の競漕會は於て他邦の端舟と其の力を較ぶるあたはざりしは抑も何故なるか願ふは軍人の不熟練にして充分は機械を運轉する能はざるは因るならん四方海をめぐらそ我邦の如きは最も海軍の熟練を要すべしと雖も清國と雖も決して之を忽緒は附すべからざるなり近時我邦は於て端舟の競漕を試むるは皆だは海軍の人のみならず帝國大學の學生を首めとし其の他諸官立學校及び重なる私立學校の生徒は皆な端舟の演習を爲すを常とせり故は



一朝外國と事を構ふは當り國民六分の一に直ち海軍は從事するも左まで狼狽するとなきに至れり宜なるかな此の日の競漕會は於て第一等の勝利を得たるや往時英國女王陛下巨大の軍艦隊を持って佛國「エルブール」を尋問せしとあり當時拿破崙第三世の之を迎へ海陸の大砲を悉く發射せしと黒烟港内を掩ふて數時消散せざりき是の暗に兩國海軍の強弱を比較せしものよて其の形況實は耳目を驚かしたりとの歐米諸邦は有名の話説なるが此の競漕會の手段こそ異なれ實は各國海軍の強弱を比較したるものよて誠は前古無双の盛會と謂はざるべからず我が邦の海軍も亦あらひかな

獸類吞噬會

此の會の地球上あらゆる猛獸を集めて一の鐵柵の中は放ち之をして相吞噬せしむるはあり是の固と香具師の興行は係り他は主意あるは

あらず即ち世間奇を好むの人情は投じて大利を占めんと欲するは外ならず蓋し人智の發達するは隨ひ金力と智力を以て爲し得べき事に進んで之を行ひ以て人の嗜好心を満足せしむるを常とせり此の會の數日前より新聞の廣告を以て世上は報道して曰く抑も本會は於て用ユルトコロノ獸類ハ熊羆、豺狼、象、虎、猪、獅、牛、海馬、水牛、梁鹿、馬、羊、猿、等ニテ中ニハ容易ニ生捕スベカラザルモノアリ而シテ此等ノ獸類ターノ鐵柵内ニ放チ之ヲ吞噬ヲ逞フセシムルキハ或ハ傷キ或ハ斃レ遂ニ再ヒ用ユベカラザルニ至ルハ火ヲ見ルヨリモ明カナリ故ニ本會ハ豫メ獸類ノ價直ト都テノ入用トヲ見積チ以テ普通ノ興行物ト異ナリ少シク不廉ノ入場料ヲ要ス然レ而此ノ事タル古今未曾有ノ珍事ナレバ好奇ノ諸君財ヲ吝マズ來觀セラレシテ請フ云々と世人此の廣告文を見て奇異の思ひを爲し皆な其の當日を俟ち居たり



其の興行場の之を根津に於る上野公園附屬地内舊時遊廓のありし跡ありといふは設け四方棧敷を廻らし中央より一大鐵柵を構造せり場内甚だ廣濶にして三四萬人を容るゝ足る蓋し此の會の未曾有の奇會にして猛獸は限りあれは數日間興行するあたはず僅々二日間の興行なるを以て看客必らず多かるべしとの見込あるを以てなり既にして其の當日となれば之を觀んと欲して來るもの陸續踵を接し豫想は違はず滿場立錐の地を餘さるゝに至れり午前十時となり興行師の鐵柵は入れたる許多の獸類を曳て場の中央より入來りたるが懸て鐵柵の口を開きて之を一時は逐ひ放ち太鼓を鳴して咄嗟の聲を揚げたり此時柵中の獸類は驚き騒ぎ仰ひて嘯くもあれば伏して猛るもあり或は牙を鳴らし或は爪を磨し敵の強弱を擇ぶ暇なくワングリ嘴附くものあれば悲聲を發して遁避する者あり雲を起し雨を呼ぶの猛獸互ひに雌

雄を争ひ相吞噬するを以て咆哮の聲天地を轟きて物凄く鮮血柵内は淋漓たり其の慘狀視る者をして思はず戰慄せしむ此の時興行師の一大猛虎を鐵柵に入れて曳來りしが懸て之を柵内より逐入れ再び鼓を鳴らして吐嗷の聲を揚げしかば柵内また湧くが如く新手の猛虎は嘗るゝ任せて吞噬し頻りは暴威を逞ふせしかば之が爲め斃さるゝ者幾頭といふを知らず柵内死躰を以て山を築き穢かゝ残りたる三四の猛獸互ひは相決闘する有様の實は眼を驚かすばかりなり此の時や觀る者手は汗を握り以爲らく全勝を占むるは熊羆虎狼はあらずんば獅子の類ならんと側目もふらず視て居ければ斯ばかりの猛獸或は噛み或は裂かれ須臾にして皆な斃れたり觀るもの一驚を吃し奇異の思ひを爲すとき只看る柵の片隅より一獸の起立する者あり以爲らく果して一頭の全勝を博したるものあり熊羆か虎狼か將た獅子かと眼睛を放



ちて之を視れば何ぞ意ん道は是れ馬ならんとの観るものまたも一  
 鷲を吃し皆な曰く獸類中熊羆虎狼の最も猛獐なるものなり而して馬  
 の最も痴鈍なるものなり然るも今猛獐の者敗死して痴鈍の者の全勝  
 を博したるの抑も亦た奇ならずやと喋々陳じて止まざりき全以爲ら  
 く然らば抑も今日の會の獸類をして雌雄を決せしもんが爲め設け  
 而して其の猛獐なるものと卑怯なるものと論なく苟くも相吞噬せ  
 しむるも足るものゝ擧げて之を一柵内よ放ちたるなり是を以て進取  
 の氣衆あるものゝ進んで勇を闘へし力を格したるを以て遂も俱も斃  
 る、よ至りしと雖も馬の獸類中最も痴鈍にして且つ卑怯の性を有  
 するが故も進んで吞噬を試むる能はず他の獸類が咆哮號呼して互ひ  
 よ格闘するの有様を見て腰を抜しブル／＼然として片隅よ傍觀し居  
 たるなり他の獸類も斯る卑怯者を相手よせん人の大人氣なしと人間な

れば云ふ如き感情にて之を度外よ放棄して顧みざりし之故も馬の僥倖  
 よして生命を全ふしたるものよて決して勝利を得たるよあらず試み  
 よ之を人間よ譬へんか維新の際尊王の儀を主唱し天下の志士をして  
 奮然として起たしめたるものゝ佐久間象山吉田松蔭の輩なり此等の  
 人々の國の爲め人の爲め只だ死あるを知りて生を知らず一身を犠牲  
 よ供し屢ば危険を冒して天下の志子を鼓舞したるを以て遂も王政維  
 新の大業を奏せしめたりと雖も身の縊綫の辱めを受け遂も囹圄の  
 鬼と消へたるよあらずや而して當時僥倖よして生命を全ふしたる者  
 ありと雖も強きがゆるゑも勝を制したるよあらず乃ち松蔭山陽象山  
 等の諸豪傑が種々の奇策を廻らし幕吏の毒手を避けて天下よ遊説す  
 るの危険を見て恐懼よ堪へず駈々競々として嫌疑を被ふらざらんと  
 を是れ勉めたるが故あり蓋し象山松蔭山陽輩の猶は熊羆虎狼のこと



く僥倖よして生残りたるものゝ猶ほ馬のことし然れども此の馬の少しく智慧ありて能く熊羆虎狼の尻馬に乗ることを知るが故に一朝時機よ投ずれば傲然として天下を睥睨し遂に愚者をして熊羆虎狼よりも一層強き猛獸と爲さしむる事あり然れども其の性痴鈍にして且つ卑怯なるが故に智者は逢ふときゝ必らず其の尻尾を看破せらるなり嗚呼世上國を憂ふるの志士仁人よ熊羆虎狼と爲りて死するを望むか抑もまた馬となりて生を全ふせんと欲するか余の死を見る蛇蝎よりも甚だしと雖ども馬となりて生を全ふせんとを望まざるなり

内外競馬會

陸軍は競馬の必要あるの猶ほ海軍は端舟競漕の必要なるがごとし表面より之を見れば出すところの損失と入るところの利益と相償ひざるもの、如くと思へるれども仔細に之を思考し來れば實に一日は欠

くべからざるものと謂ふべし蓋し世界萬國の間は立て儼然獨立國の躰面と全ふし各國と其の強弱を争はんと欲せば是非とも海陸軍の強大に依らざるを得ず而して之が強大を希圖するに當り兵隊の固より多からざるべからず軍艦も亦た堅牢からざるべからず大砲や小銃や其の他諸多の軍器また精巧ならざるべからずと雖ども一國の人民みな海陸軍の事情に通曉するに如かんや試みよ見よ英なり佛なり米なり魯なり其の國民が平生軍事に熱心あると小兒の衣服を陸海軍の軍服に模倣し其の戯弄物の如きも鐵砲やハベル其の他すべて軍器に模倣したるものゝあらざれば手は觸れしめざるを普通と爲するよあらずや加之ならず芝居寄席其の他諸種の興行物に至るまで概ね活潑なる樂を奏し我邦の如く誨淫導治の歌曲を以て人の心をトロケしむるが如きことを爲さざるなり此を以て平生碧眼人の街衢を通行するを



見るも躰度正格にして數十名の歩行殆んど一の如し此等の事例を以てするも泰西人の軍事も熱心なるを知るべし。凡そ世上萬般の事最も注意すべきは平素の行爲如何に在り平生西洋立食の不便を罵り未だ一たびも實地を試みしとなくして俄か公衆の宴會に臨みナイフの持方も知らざるべきに随分不都合の事ならん此の時當り俄か立食の法則を研究せんと欲するも既及ばざると同じく平時に於て陸軍の必要を感せず更軍事は係ならずして一朝危急存亡の場合に至り俄か馬の稽況を爲すも及ばざるなり十九世紀の時代は所り此等の理窟を感ずるものあり共同競馬會社なるものを設立して之が擴張を圖りしものありしと雖も或る一部の人々の熱心は止まり未だ國民一般の熱心を惹起さざりしを以て其の盛大を致す能はざりき當時較や盛域は達したるは横濱根岸の競馬會にて是

は當時外國居留地の側は在り自然碧眼人の贊成を得たるも因るならん降つて現今に至り國民稍や軍事上は注意するに至りしを以て競馬會の如きも漸やく繁盛を致し遂は内外人の協力を以て一大競馬會社を設立するに至りたり

抑も此の會社の資本金五十萬圓を以て成立し毎年春秋二期上野不忍池畔の競馬場は於て催すを例とす入場券は上等三圓中等一圓下等二十錢每會三日の間之る施行し其の収益金七八千圓は降らむを以て其の盛大なるを推知すべし馬見場の入口はアーチ形の綠門を設け之は各國の旗章を懸けたり門を入れは陸軍樂隊樂を奏し競馬一番毎は狼烟を打揚げ以て興を添へたり競馬の距離は七八町乃至十五六町まで一番毎は差異あり馬は二頭以上八九頭を以て限りと爲す騎手の帽子及び衣服の色を區別して勝敗を見るも便ならしむると猶は端舟競漕



會のどとし時刻の午前十一時、初め終日十五番の競走を試むるなり。馳て定め時刻となり、騎手七名、悠然として馬を跨り、塙も出れば馬の勇んで走り出んと欲す。騎手の内外人混合して、赤の日本、黄の佛國、茶の魯國、青の米國、白の英國、樺の清國、黒の日耳曼なり。七頭の騎手已に一列に並び、審査員の赤旗を打揮るを相圖に各々鞭を加ふれば、馬の疾風のごとく馳も出で、砂煙りを起て、走るとき一同の見物人の最負の騎手を思ひ、一呼び赤勝て、黒勝てと大呼する有様、宛がら狂人のごとく、其の奇觀競漕會と殆んど相擇はざるなり。既にして一番の競走を果たせば、一番勝及び二番勝の意氣揚々として、審査員詰所より來り、其の斤量をはかりて、賞金若くは賞品を受く。賞金の一番勝百圓以上三百圓以下、二番勝五十圓以上百五十圓以下とし、賞品の時計其他のものご爲す。二日目よの婦人財寶の賞與を受くるとあり、是の豫じめ幾番目の競馬

と定め置き、其の競馬よ一番勝を制したる者之を受くるの制、規よて財寶の中よの五百圓乃至千圓を入るとあり、是の競馬中最も得がたき賞品よして、殊よ此の社會の一大名譽と爲すものなれば、騎手の秘術を盡して競走を試むるなり。此の時や見物人の一文よもならずと雖も、皆な手よ汗を握り、心中亦よ勝たせ度思ふの同情相愛するの理あるか、其の盛況の如き、の拙文の能く盡すところよあらず、友人愛柳子曾て春期競馬の狂詩あり、掲げ以て証と爲す

上野山下不忍邊、馬廐塙所新築全。春期競馬又別段、新聞紙上評判傳。時恰四月花盛節、氣候寒暖平均。天其上日曜、休息日。猫兮杓子皆出懸、馬是立派多。舶來或云飛燕、或岩川乘手。勿論一粒撰、互振腕前爭先鞭。有青有赤、又有黑色々々、洋服支度鮮爲後、爲先歩々危見物。握汗夢中然、第一第二勝負定。夫々褒賞何百圓、此塙已終烟火。僅一層添與一層妍。



等しく是れ馬なり而して其の馳驅する方り緩急迅速の差ある何ぞや只騎手の上手と下手と因るのみ故に一朝事有るに當り馬は跨て軍に出で砲烟彈雨の間を奔馳するも馬術は熟練せざれば畜だも進退かけひきま自由を得ざるのみならず敗れて亡ぶるときは最も不便なるべし又敵の馬疾くして我が馬遅ければ遂に之を撃滅すべし然らば則ち軍人の馬術は熟せざるべからざるに勿論一般國民もまた平素此の事習熟しイザ鎌倉と云ふ時周障狼狽せざるや用心得るに最も肝要の事多し馬は元來人情を解せざるなり國の危急存亡に關するときは更は頓着せざるなり而して之をして千里の能を現らしめアツパレ國の爲め力を尽さしむると否らざるに騎手の巧拙如何に在り平生馬を馭するの法を習はず而して俄か之に騎らんと欲するものあらば馬の舌を吐き左様ウウウの參らずと云ふならん余また

狂詩あり之を左に録す

春秋二期競馬時人波打寄不忍池今年春期又格別水産繪畫競珍奇當時有水産繪畫兩競進會故及猫兒杓子出見物近所商家相應滋山上山下又池畔老若群集難立錐其中順次競馬始逸物爭先如風馳二番三番又四番五騎六騎七八騎赤勝白勝呼立頻人々聲泗根氣疲其時砲聲報正午食物店皆景氣宜雁鍋占壩山下町三橋亭成三橋溜(西洋料理)揚出込合如洗芋紫蘇飯忙御馳過(揚出紫蘇飯共爲茶漬屋)上等其割景氣薄抱料理番手明姿欠伸百遍代物腐出入不償亭主悲何況競馬見物多見倒内幕恐與表面差近來世上評判惡此儘成行終難支乍併競馬畢竟遊戲耳與廢不關世盛衰赤勝白負無痛癢寄觀只爲見物嬉看來世界一場競馬會勿使黑髮負赤髭

日本町



日本町といふ日本橋以南京橋に至るまでの總稱なり即ち之を細別すれば通一二三四丁目南傳馬町一二丁目と爲す此の處に現二十世紀に至り家屋を改築したるものにて屋宇の皆な野州産の花筒石を以て八層を疊み其の美麗云々方なし又往來に屋宇と高度を均一にして上は鉄梁を架し玻璃を以て全く之を蓋ひたれば雨中と雖も地上乾燥して一滴の雨水を洩さず故に一名水晶街といふ玻璃の水晶と相似たればあり又家屋の下層の概ね中等以下の商人の住居に屬し二層三層の重も紳士豪商の住居となり四層以上の次第は卑賤の者の住居となす而して二層以上の巾二間許の回廊を設け人の之を通行するを街衢と異ならず其の光景頗る佛國巴里の市街と相似たるものあり蓋し我國人の從來地位の高きを尋ひ智識も亦く學問もなき癖に等外出仕の辭令を得れば天へも昇る心地して忽ち齷齪をひねくり人民を

蔑如せんと欲するの風習あり故に家屋の如きも五層六層七層八層など、無間矢鱈に高く造り其のテツペシに居らんと欲す此を以て十九世紀の時代より割烹店等へ至るも二階より三階を貴び三階より四階を重んずるの風習ありて貴客あらば下坐敷への招せず先づお三階へと云へり先來二階三階の頗る險呑なるものにてソレ火事と云つても急に通出すと能はず地震の時も下坐敷あれば振落さるゝ氣遣ひなし現に明治二十三年の大地震如何ある地震ありしか忘れたりとも卑き居たる人の別條なかりしが高き居たる人々の大概揺落されたるよあらずや是れ智慧もなく學問もあきくせよ徒らに地位の高きを望みたる天罰ならん

近來我が邦人の智識大に發達し徒らに地位の高きを望むの愚なるを隨り却て上を卑しみ下を尊ぶの風を爲すに至れり故に今日本町よ



七八層の大層高樓を築くと雖も決して高きを貴ぶが故もあらずして即ち地面の狹隘なるも由るなり蓋し十九世紀の時代も當りての東京市内の人口七八十萬も過ぎざりしも現時も至り頗る増加して五百餘万も及びたるを以て己を得ず斯る高大の建築を爲し市街の上も數層の市街を累ね造りたるなり故も此の家屋の家賃の下層稍や廉よし二層三層の極めて貴とく四層より上も登るはと愈よ低廉に至るなり此の事たる十九世紀時代の人への想像の及びざるところなれども社會の漸やく進化して民の自由を得るに至らば上下の勢を轉倒すべきと實も争ふべからざるの事實とあす世の高きを尊び卑きを賤しむもの以て如何と爲す

## 改良演劇

高幾巍然として曉烟を破つて聳へ層上數片の扁額を掲げ當時演ずる

ところの劇部の状を寫す是れ實も改良技劇を演ずるの場と爲す其の名を演劇館と稱し舊時の如く座の字を用ひず蓋し十九世紀の世俳優の醜行日甚だしく世道人心を害する少なからざりしを以て之を改良すると同時も其の名稱をも并せ變更したるなり往時徳川氏の世戲場の都下も在るもの曰く守田曰く市村曰く猿若俗も之を三戲場といふ其の他兩國廣小路若くは木挽町采女原等の地も場を開くもの之をおテ、コ芝居と云ひ皆な茅筵もて外を蔽ひ疎板もて場を造り其の粗雜乞食小屋も異ならず此を以て一名乞食芝居とも云へり維新後演劇漸やく隆盛となり藝のおテ、コなるもの亦たみな一戲場の觀を爲す今その重なるものを擧ぐれば京橋采女ヶ原も在るを演劇館(即ち改良芝居あり)と云ひ新富町も在るを新富座と云ひ淺草猿若町一坊も在るを猿若座と云ひ同二坊も在るを市村座と云ひ同鳥越も在るを中村座



と云ひ本郷春木町に在るを春木座と云ひ蝸壳町に在るを中島座と云ひ久松町に在るを久松座と云ひ四ッ谷に在るを桐座と云ひ本所に在るを壽座と云ひ其の他小劇場の芝下谷牛込等も散在するもの一よしして足らず一名之を道化手踊といふ而して采女ヶ原の演戯館に宏壯昌盛兩ながら都下第一となす毎歲例して場を開く三四回毎回概ね三四句或は西洋新案の戯を演し或は我邦古來の戯を演す毎戯概ね六齣後四時より同十時に至りて止む劇場の結構正面の高き處を舞臺と爲す舞臺の前面稍や低き廣場を土間と云ひ舞臺の三方高き所を棧敷と爲す皆な椅子を列ねて看客の居るところは供す其の値各々差等あり場面左右舞臺は續き棧敷あり之を花道といふ俳優の打粉裝束を爲すの場三層樓に在り故に人三階と云へば俳優の打粉裝束の場たるを知るその他圓圓燈器美ならざるなく備へらざるなし就中場面諸所は電

氣燈の備へあり夜に入れば華燭燦然として秋毫の未もまた易々として分つべきなり

演戯館の顯官紳士の相謀つて設立するものなり故に天下の名優擧げて此處に出勤せしむ俳優また此に出づる能はずんば無上の耻辱と爲し給料の多少を論せず出勤を希ふなり當時此の館の俳優を擧ぐれば曰く市川團十郎(十六代目)なり以下之は準ず曰く尾上菊五郎曰く中村芝翫曰く市川左團治曰く市川右團治曰く中村時藏曰く市川權十郎曰く市川九藏曰く尾上多賀之丞曰く尾上家橘曰く中村福助曰く片岡我童曰く市川小團治岩井紫若中村鶴藏尾上松助大谷門藏市川團右衛門市川猿十郎坂東喜知六中村荒五郎市川幸升岩井繁松澤村源之助澤村田之助澤村訥子中村荒次郎等また之は次ぐ其の他戯曲の作者あり唱歌者あり奏樂者あり一々枚擧げ暇まわらず既にして定刻に及べば來



る者幼あり老あり男女尊卑或ハ杖を曳き或ハ車を驅り皆な入場券を  
 購ふて塙裡入り去る當時演ずるところの技劇題して肉一斤といふ  
 有名の劇場作者セキスヒーヤの作にして伊太利國に於ける裁判上の  
 一奇談を脚色したるものなり請ふ之を左に録せん  
 序幕アントニチ邸宅の塙本ふたい西洋室油繪の額をかけ舞臺前庭の  
 模様よろしく爰に國五郎竹松椅子に倚り書物を見て居る兩人よろし  
 くこなしあつて是より互ひに日夜の勉強に上達なせしも皆な主人の  
 御恩ト臺詞ある向ふよりハツサニチ(左國治)出で來りて内へ入道りお  
 取次を頼むト之をき、件の書生國五郎出で是ハハツサニチさん  
 でムるかシテ御用でも御坐つてかト左國治ハ心は濟まぬ事のあるこ  
 なしよて(左國治)至急は御面會致度宜しくお取次下されといふ(國五郎)  
 入り間もあく出で來り應接所へ接内す主人アントニチ(國十郎)入り

來り是ハハツサニチ君能くお尋ね下さりましたト兩人よろしく  
 臺詞あり(左國治)至急は御面會を願ひしハ外ならず我ハ豫て知らる、  
 如く身至つて負しき故常は君の御恩を被り御庇よて兎も角もして居  
 れど如何も心苦しき限りなれば何卒して財産はありつき相應しき  
 活計を爲し君も厄介ならざるやう兼てハ君の御恩は報ゆる事を  
 爲さばやと種々ハ心を痛むれど性來愚鈍の小生よて習ひ得たる學術  
 技藝もなければ思ふ事の半ばもあらず然るは爰に一つの幸福を得た  
 るハ近比或る豪富の巨額の財産を遺して死したる人ハ一人の女あり  
 小生頗る其の女を愛するをもて父の存生中より屢ハ其の家を訪ひ親  
 しく交はりたるは我が思ふのみならず女も亦た我を慕ふて心の丈け  
 を筆に寫し幾度か言越したりき今ハ其の家ハ女のみよて家繼ぐ人も  
 あらざれば女ハ小生の妻に娶り其の財産は依り我が産を起さんと略



ば心は決したれど只だ如何せん貧困の此の身斯る富豪の愛女を娶  
 らんよの亦夫々の用意なくての適ふまじ夫等の用意をなさんよ先  
 立つもの金の工面其の金なき故又しても君と談らんとて来りしな  
 り是まで長く恵みを受け重ねて厄介かくるの實は面目なき事なれ  
 ば君より外は此等の事を談らふ人もなまよみの甲斐なき此の身を察  
 し給ひ暫時の間三百弗を貸たまへ偏へは頼ひまならむと云ひ悪く  
 さうは頼む(四十)承れば如何にも御最もの次第去れど生憎手許は金な  
 ければ少し考へ幸ひ我が知己はサイロクと云へる金貸あり此奴中  
 々の白徒は常は我と中おしく我を讎とし怨むなれと食りて飽く  
 と知らねば謀るよいと易かり御身の爲めは我れ何ぞ些少の耻を忍  
 びざらん誘たまへ諸共は彼が家を訪ひて語らひ見んと身を起して急  
 立つることなし宜敷左(四十)の氣の毒氣は幾度か謝し然らばよしな頼み

入るト(四十)は誘はれ此の家を出る此の模様よろしく道具廻る  
 「サイロク宅の場本舞臺立脚附坐敷の大きいなる時計あり庭前の模様  
 よろしくアントニヲ、ハツサニヲ兩人訪音は折からサイロク(菊五郎)在  
 宅まで出迎へ主客坐定まり時候の挨拶すんで(四十)今日参りし余の  
 儀はあらず是なる余が刎頸の友はてツバサニヲと申す者此頃妻を  
 娶るは付結婚の入費三百弗を貸してよと余は對しての依頼なれど生  
 憎手許は金なきま、御身は借らんと斯く連れ立ちて推参せり若し我  
 が頼みを承諾給ひ、我等より引當として近々歸港すべき手船の積荷  
 を書入べく最も利息の高きを厭はず如何程なりとも拂ふべしと思ひ  
 きのにて云ふ(菊五)の眼を閉ち首を低れ暫し考へやがて首を擡げて冷笑  
 ひ足下の平生余は對し高利を貪り人の難儀を顧みぬ白徒なりなを辱  
 かしむるのみならず公衆の面前にて余が衣服は唾を吐きかけ又は足



よて蹴たる事をよも忘れまじ余がその時の口惜さの汝が肉を劈き食  
 らも飽足らぬ思ひなりしを今日まで堪へ居たるなり殊も御身の余も  
 對し犬も劣る猶太人と嘗りしとあり犬も劣る猶太人よ何故金貸  
 せよ助けてよと云ひる、か余の犬あり異類の人よ貸すべき金なしト  
 きつとなる(團十)足下の云ひる、所道理なり余も男兒なれば今更も御  
 身を罵り辱かしめし事なしとの申さず誓ひ誓ひとして余が頼む三百弗  
 を貸し呉る、の即ち怨も報ゆるも恩を以てするなり斯れば余も必ら  
 ず約束を履行すべく萬一違約あらば足下のまよく罰金を差出すべ  
 し(菊五)の何思ひけん俄か顔面和らげ君の何故斯まで情けなき事を  
 云ひる、多余の君の心を引く爲め戯言を云ひしのみ君が頼の金子の  
 必らず御用立申べし利子の一錢も申受ざるべし君が手船の抵當も無  
 用なり(團十)ソリヤ眞實よ(菊五)固より偽り申さぬ只だ証文面よ若し

返金の期日を違へなば君が身軀の中何れの部分までも肉一斤を我よ  
 切り取らすべき事を認めらるべし(團十)の喜びたる軀よて開いと易  
 き事なり余の其の証文よ記名捺印すべし此時ハツサニチ(左團)の團十  
 よ向ひて眉を縋め御身が親切謝するも餘りあれを斯る危険の文言を  
 加へ萬一返金よ差支ふる事あらば臍を噛むとも及びがたし余もまた  
 斯る危険の金を使ふを快しとせず此の事ばかりの措き給へ(團十)呵々  
 と打笑ひ足下左まで危ふみ給ふな我が手船の此の金子返濟期日まで  
 よの必らず歸港せん萬一歸港せざるとも其の期よ至らばまた融通の  
 附かざるをあらんやト此のところ臺詞よるしくト、團十菊五左團の  
 三名打連立て代言人の許よ至り肉一斤を書入たる証書よ記名捺印し  
 三百弗の金を借り入る此模様よるしく幕  
 二幕目ボルチャ宅の場ハツサニチの(左團)目出度婚姻と、のひ妻が



ルチヤ(福助)の家も在り此ところ宜敷(福助)妾(けよ)の今日まで此の家(かみ)の主人  
 なりしが今より(あらた)更めて主公(ぬし)が此の家(かみ)の主人(かみ)にて屋根の上より(かま)の  
 下の灰(はい)まで君の所有(しゆ)なり妾(けよ)の君(きみ)も百歳の身(み)を任(まか)せ誓(ちか)ひとして此(こ)の指  
 環(ゆわ)を参(ま)らする間(ま)君(きみ)常(とこ)に之(これ)を指(ゆわ)め箝(は)め妾(けよ)と思(おも)ひ玉(たま)へ萬(ま)一(いち)之(これ)を人(ひと)も與(あ)へ  
 或(ある)は遺(おとし)失(し)玉(たま)事(こと)なら(ら)ば妾(けよ)の君(きみ)を不(ふ)實(じつ)浮(う)海(かい)と思(おも)ひ歸(かへ)し金(かね)無(む)垢(く)も  
 金剛石(こんがうせき)を鑲(う)めたる指環(ゆわ)を取(と)り外(あ)し渡(わた)す(左團)の嬉(うれ)しげなるこなしありて  
 之(これ)を左(ひだり)の指(ゆわ)め箝(は)める折(をり)から(ペニス)ある(アント)ニ(チ)より急(きよ)飛(ひ)脚(あし)よ(て)持(も)來(き)る  
 りたる由(よし)よ(て)立(た)開(ひら)番(ばん)の(竹藏)一通(いつ)の書(か)面(めん)を持(も)來(き)る(左團)の之(これ)を開(ひら)き見(み)て  
 仰(おぼ)天(てん)したるこなしあり(福助)の左(ひだり)團(だん)治(ぢ)の顔(かほ)を見(み)て如何(いか)なる事(こと)の起(おこ)りし  
 か苦(くる)しからず(バ)聞(き)かせ給(たま)へ(と)云(い)ふ(左團)低(ひ)れたる顔(かほ)を擡(た)げ余(あ)の囊(かさ)も御  
 身(み)も語(かた)りたる(と)ありと思(おも)へ(バ)定(さだ)めて承(うけ)知(ち)し給(たま)へ(ん)親(おや)友(とも)ア(ン)ト(ニ)チ(ガ)  
 余(あ)を救(たす)め爲(な)め肉(にく)一(いち)斤(しん)を抵(たい)當(あ)とし猶(なほ)太(お)人(ひと)サ(イ)ロ(ク)より三(さん)百(ひゃく)弗(ふ)を借(か)り豫(あ)ら

て之(これ)を返(かへ)さん爲(な)め(胸算)し居(ゐ)たる持(も)船(せん)の破(やぶ)損(そん)して積(つ)荷(か)残(ざん)らず沈(しん)没(ぼつ)し  
 たるより圖(と)ら(ず)違(ちが)約(やく)とありア(ン)ト(ニ)チ(ガ)の身(み)を殺(ころ)して返(かへ)濟(さい)爲(な)す由(よし)ト(そ)  
 の手紙(てがみ)を示(し)す(福助)手紙(てがみ)を一(いち)讀(よ)して少(すこ)しも騒(さわ)がず先(ま)づ何(なに)事(こと)を棄(す)て置(お)き  
 ても(ペニス)よ(て)赴(む)き給(たま)へ金(かね)力(ちから)よ(て)濟(さい)む(と)なら(ら)借(か)りたる金(かね)の幾(いく)層(そう)倍(ばい)なり  
 とも債(せ)主(しゆ)が望(のぞ)み(よ)任(まか)せて與(あ)へ給(たま)へ(ト)尙(なほ)は臺(たい)詞(じ)ありト(バ)左(ひだり)團(だん)治(ぢ)の良(よ)友(とも)  
 グラチノ(家桶)を伴(とも)ひ身(み)仕(し)度(ど)して(ペニス)よ(て)出(で)立(た)す跡(あと)も(福助)のきつと思  
 案(あん)し一通(いつ)の書(か)面(めん)を認(た)め使(つか)を以(も)て縁(えん)家(か)なる(ペル)ヲ(リ)チ(ガ)と云(い)ふ裁(さい)判(はん)官(くわん)の  
 許(もと)も持(も)たせや(り)間(ま)もなく使(つか)の者(もの)歸(かへ)りて返(かへ)書(か)を差(さ)出(で)せ(バ)福(ふ)助(すけ)開(ひら)き見(み)て  
 莞(わん)爾(に)と笑(わら)み急(きよ)に法(はふ)官(くわん)の服(ふく)を纏(まと)ひて男(おとこ)の姿(すがた)とあり(グラチノ)の妻(つま)よ(て)侍  
 女(むすめ)リツサ(源之助)も男(おとこ)の衣服(いふく)を被(か)せ裁(さい)判(はん)官(くわん)の書(か)記(き)生(な)も打(う)扮(は)せ臺(たい)詞(じ)  
 ありト(バ)ペニス(を)差(さ)し出(で)立(た)の摸(も)様(やう)宜(よろ)敷(敷)道(だう)具(ぐ)ま(わ)る  
 「ペニス裁(さい)判(はん)庭(てい)の場(ば)本(ほん)舞(ま)臺(たい)上(じやう)段(だん)テ(ー)フル(椅子)の備(び)へあり下(くだ)よ(と)ま(り)木



を設け左右は傍聴席ありすべて大白洲の道具爰はボルチャ(福助)の法官の服をつけ正面の椅子は倚りテリツサ(源之助)も男装にて傍らの書記席は在りハツサニナ(左團)のクラチノ(家橋)と共に傍聴席は扣へ尙ほ外にも多くの傍聴人あり原告人サイロク(菊五)被告人アントニナ(團十)の二人とまり木の前は立つ此の時法官の福助の原告菊五郎は對ひサイロク汝が訴訟ハニスの法律は従ひ被告アントニナより証文通り抵當物を受くべき權利あり去りながら汝も知る如く我々も幸福を與へ我々を保護し給ふ神の常は慈悲を旨とせよと教へ玉へり汝の平生神を拜するや如何(菊五)の聞かざるより余の只だ証文は約定せる如く抵當の品物をだも受取らば異存之なく法官の御説諭を煩はすまでもなき事にて候福助の被告(團十)は對ひ其方の文証の金員を返辨し能はざるかと問へば(左團)の傍聴席より進み出で(團十)の答へを待た

ず決して返辨し能はざるにあらば証金の金高ハサイロクが望みは任せ廿倍之卅倍之或ハ幾百倍よても返辨すべき所存ありト急込みて云ふ(菊五)イヤ余ハ決して金を望まず畢竟証文ハ返辨期日を違へぬ爲め取換したるものにて既ハ期日を違へれば抵當の品物の原告の所有たるを勿論なり今更金の多寡を論じて正當の約定を破ふるべきや余ハ只だアントニナが肉一斤を申受けあは夫にて事足れりと云ふ(左團)泣かぬばかりの顔附にて法官の前は拜伏し法官閣下此の憐むべく哀しむべき情狀を酌量して何卒アントニナが身を全ふせしめ給へと嘆く福助汝が哀訴ハ爾るとながら一たび布定したる法律ハ寸毫も變更する能はざれば餘儀なき事とあきらめよ(菊五)スリヤ拙者の申立が正當で御坐り申すかアナ嬉しや喜ばしや神の此の世は出現して斯く法官と化し玉ひしかト詞を尽して堂の(福助)その方の其の証文を讀上げよ



(菊五)いと喜べしげよ聲高く証文を讀上ぐ(福助)その証文は依れば其方のアントニチが心臓に近き肉一斤を切取るの権利あるを去りながら今被告の云ふ所を聞くは借たる金の残層倍までも原告が望みよ任せ返済すべしとの事なり汝も人の肉を切取り故意に人命を断たんとて斯る約定の爲さるべし畢竟被告の急を救へんとの慈悲心と汝が營業とする金貸の利を得んと二つより成立たる証文と思へるれば汝が望みよ満足すべき丈の金を受取りその証文を引裂くが人たる者の道ならん(菊五)いよ、狂ひし躰にてイヤ拙者の一旦精神を誓を立て証文通り被告の肉一斤を申受んと断定したる上の如何なる人の説諭たりとも變じがたし(福助)のアントニチの(團十)は向ひ斯る証文を差入れたるは汝が不運なり最早救ふべき術なし速かよ胸を開きてその肉を與へよ此の時(菊五)の用意のナイフを逆手よ取り團十郎を疾視(福

助)團十郎は向ひ死に臨み申残す事なきや(團十)余の固より覺悟せし事なれば思ひ置くとなし只だ暫らく猶豫を願ふと傍らなるハツサニチの左團次と手を握り(團)余の君と永き別れを爲すべし余の君が爲めよ死するなれと決して氣の毒と思ひ給ふな只だ余が爲めよ細君よ對し余が君を愛すると黒海より深しと傳へ給へ願くは夫婦睦ましく殿百歳の壽を終へて泉下よ再び見ゆべし(左)涙を流し余が身命と同様よ愛憐する妻を娶り得たるは全く君の賜ものなり爾は我が身命も我が妻も地球上の萬物一として君が生命よ代ふべきものなし此場合よ至る上は此の惡鬼の爲めよ我が身命を抛ちて君が生命を救はざるべからず時に法官の(福助)は左團次よ對ひ朋友の爲め生命を抛つといふ義氣の感するは餘りおれを若し汝が妻をして此の處に在らしめ此等の事を聞かしめば定めて嘆き悲しむならんと諭すト、サイロクの(菊五)は



ナイフを取直しアントニナ(圖十)の胸を開き咄嗟突立んとするこなし  
 宜敷此時(福助)きつとなりサイロク暫く俟て(菊五)俟ての御意(福助)汝  
 の肉一斤を切取るよ當り人肉を量るべき天秤を用意したるや(菊五)エ  
 、(福助)肉を切取り出血して死せざるやう外科醫を伴ひたりや(菊五)拙  
 者の左様も約定を爲さねば外科醫を伴ひ参らず肉一斤切取たる爲め  
 不幸よして被告人死すとも餘儀なき次第なり(福助)黙れサイロク此の  
 証文よ肉一斤と記しあれと血の一滴も興ふべしと書載せあらずアン  
 トニナが肉一斤を切取るの汝が權利あれども此の基督教人の血液を  
 一滴半點たりとも出すよ於ての汝の謀殺の罪を犯すものなるぞ(菊五)  
 エ、(福助)ベニスの法律の汝が所有の土地財産を没収し汝を相當の罪  
 よ行ふべき明文あるぞ此時(菊五)の困りたるこなし宜敷傍聴席よ扣へ  
 たるハツサニナの友人グラチノ(家桶)の喜びの餘りサイロクが發に云

ひたる詞を假りアナ嬉しや喜べしや神の此の世に出現して斯く法官  
 と化し玉ひしかと賞る(菊五)の落膽せし様子よて此上の貸したる金を  
 受取り事済ましたしといふ氣色を現は(左圓)の喜びよ堪へかね此よ  
 金あり返すべしと叫ぶ(福助)の左圓治を制し左まで急ぐなけれサイロ  
 クの肉一斤の外金の幾層倍よても受取らじと申たり約定されば之を  
 履行せよ被告も決して拒むなけれ去りながら血の一滴も落すよを許  
 さず肉も一斤の外一毛一微違ふことを許さざるぞ尙此外よ詞臺ありト  
 、(圖十)の請求よより(菊五)の財産の半ばを死後己が女夫婦よ與ふべし  
 どの約定証文を認めて放免(福助)の更めて(圖十)よ無罪を云ひ渡し此處  
 模様よろしく幕同法庭の場爰よ法官ホルチャの(福助)の舊の席よ在り  
 其の上坐よベニス公(芝甞)下坐よ書記ナリツサ(源之助)扱へたり白洲よ  
 のアントニナの(圖十)ハツサニナの(左圓)グラチノの(家桶)居なら(圖十)



の芝翫は對ひ適れ賢明の御裁斷はより不思議は生命を全ふし此の洪  
 恩死するとも忘れ申さず何卒法官を我が茅屋は伴ひ心ばかりの櫻應  
 仕り度公よりよしな御取なし下され度存じます(福助)傍らより芝翫  
 は對ひ人の正邪を判つゝの法官の職分にて訴訟人より謝儀を受くべき  
 理由なし去れと彼が誠意もだしがたければ望みは任せ度い思へと他  
 は遣れがたき用事あれば直ち歸途は就かざるべからずと云ふ(芝翫)  
 いうなづき此方に向ひ汝も聞くが如く今より餘儀なき用事ありと云  
 へば他日を俟つべし去りながら此の法官は汝が爲めよ再生の恩人  
 なれば其の恩儀は報ゆる爲めは夥多の贈物を爲すは固より當然の事  
 なり今般の事件たる正當の貸借を種となし公然汝の肉を切りて死は  
 致さしめんと謀りたるものよ相違なければ巧みは法網をくぐりた  
 るを以て斯く云くベニスを始め多くの法官等も殆んど思案は餘り彼

れサイロクを屈服せしむる能はずんば遂は堂々たる一國の法庭は於  
 て公然惡意を遂げしめん實は由々敷大事なりと一同頭腦を病ましめ  
 たるよ此の法官の賢明はより無事な事すみ汝の命を救ひをるの音は  
 汝の幸福ならず實は此の法庭の面目なりと稱賛しやがて坐を起ち退  
 出す跡は(左團)打喜び(福助)の我が妻ポルチャと氣が附か  
 ねば類りし禮を厚ふし實はベニス公の申されし如く貴官は我が再生  
 の恩人なり恩儀餘り大よして報ゆべきもの、微少なるより如何し  
 て宜からんと心感ひぬ今日御用事ありてはお招き申すともならず希  
 くはサイロクは返すべき三百弗の手は在るを當坐の謝儀として差上  
 なければ御受納を願ふ(福助)の之を見向もせず斯くまで云ひるもの  
 を無下は辭むも本意ならねばト少し考へ何がな足下の身軀は添ふた  
 る物を申受ふ(左團)打喜びツレかコレかと感ふ(福助)足下が手は穿ける



手套を贈られよ夫よて余の満足せり左團の道心易き事なりと手套を外し差出す(福助)の手套を受取らず余の今手套を所望したれど又急よ足下が左手の中指に穿れる指環を欲うなりたれば何卒夫を贈られよ余の其の指環を穿めて長く此の訴訟の紀念とすべし(左團)のハタと行詰り恐るゝ福助は對ひ誠を申上りたき次第あれど此の指環に此の法廷を煩はし良友の命を賭けて娶りたる余が新婚の妻が贈物よて如何なる事のありても人よ遣やせ失はんと誓ひたる品あれば思ある法官のお所望されどお心よ従ひがたし此儀の曲てお許し下され(福助)の不興の躰よて解らぬ人もあるものかな足下の我が恩よ報ひん爲め何れ贈らんと云ひながら今更辭むの心得がたし左はと大切の品なれば何故はじめよ云々の由を傳へ給はぬ斯る呑齧なる人の物受ん心苦し措ね〜と云ふアントニナの團士の慌忙て(左團)の手を取り互

ひよ臺詞ありト、法官の福助は指環を渡す次よ書記チリツサ(源之助)も此の裁判よあづかり相當の力を盡したれば(家橋)より謝を受けて然るべしト(福助)のあつかいよて是も指環を受く此處模様よるしく幕

三幕目(バツサニ)宅の場(愛よボルチャ(福助)のチリツサ(源之助)を伴ひ夫より先よ歸宅して居る折からバツサニ(左團)のアントニナ(團十)を我家よ歸り來る(福助)知らぬふりよて出迎ひ思ひしよりの早かりし首尾の如何(アントニ)君どの此方なるか宜くしえ來ませしト云ひて奥よ伴ひ主客坐定まり初對面の挨拶すみ(左團)の福助は對ひ裁判の模様を語る此時(ラチ)の夫婦次の間よて聲高よ争ふ様子(福助)の坐ながら聲をかけ歸り早々何事ぞや争論なすも時よこそよれ珍客の手前も憚らずやといふ此時(ラチ)の(家橋)チリツサ(源之助)の兩人出來り(源之助)の



福助は對ひグラチノ君の妾が指環を與へしとき必らず失ふまじと誓ひし詞は背き今聞けり腹立しや法官の書記は與へしと云ひるれと開の遁辭よて實に他女は與へられしならん家福のイヤ／＼左よりいらずと打消す(福助)指環を人々與へしにグラチノ君の過ちを妾も且那も捧げたる指環の必らず誓ひ玉へる如く所持し居らるゝなるべきま去りとの薄情のグラチノ君やト煽る家福ボルチャ君よ爾か曰ひ玉ふなハツサニチ君も其の指環を法官に與へ給へしを(福助)打腹立ち道に嫉ましや腹立しや且那の指環を法官に與へ給へしとの偽りよて外は増花やりて其の女は與へ給へしならん左圍(開)の御身の邪推あり我が指環を與へしにアントニチ君の命を救ひし法官なりト互ひは臺詞ありアントニチの圍十郎の聞兼ね開を仲裁せんとす(福助)の之を止め笑ひながら衣袋を探り指環を取出し左圍は對ひ再び人手は渡し玉ふな

ト渡を(左圍)の手は取り繰返し見て吃驚言葉なし(福助)實に云々とベルラリチの指揮は從ひ假し法官の姿は出立ちチリツサーを書記生よこしらへ首尾よくアントニチが命を救ひたる趣を詳らふ述べ一同その才略は感じト々笑ひとあり主従夫婦睦まじく目出度大切とある  
 往時俳優を稱して積乞兒と云ふ深笠よて面を蔽ふはあらざれば市中は出入を許さず蓋し我邦演戲の濫觴に西京亂積は演すればなり維新一來大は歐米の風俗を輸入し此の舊慣を一洗し啻だは之を賤しまざるのみならず從て之を重し顯官縉紳共は來往を爲すと雖も元來教育は乏しさを以て其の處世高尙ならぬ動もすれば舊時の乞食根生を出し婦女の甘心を買ひ阿堵物を掠むる者あり世人之を男私窩子と云ふ誠は偶然はあらざるなり現世は及び大は面目を改めまた往時の積乞兒を以て論ずべからず名の圍十郎と云ふ左圍次と云ひ菊五郎と云



ひ家橋と云ふと雖とも其の人物の即ち雲泥の大差あり往々此の社會より出で、國會議員となり又ハ樞要の地を當るものあるの實は俳優社會の面目と謂ふべし嗚乎また盛んなるかな

東京未來繁昌記 畢

明治廿年三月十六日版權免許  
同 廿年五月廿五日發賣

定價金四拾錢

著 者

神奈川縣平民

大 久 保 常 吉

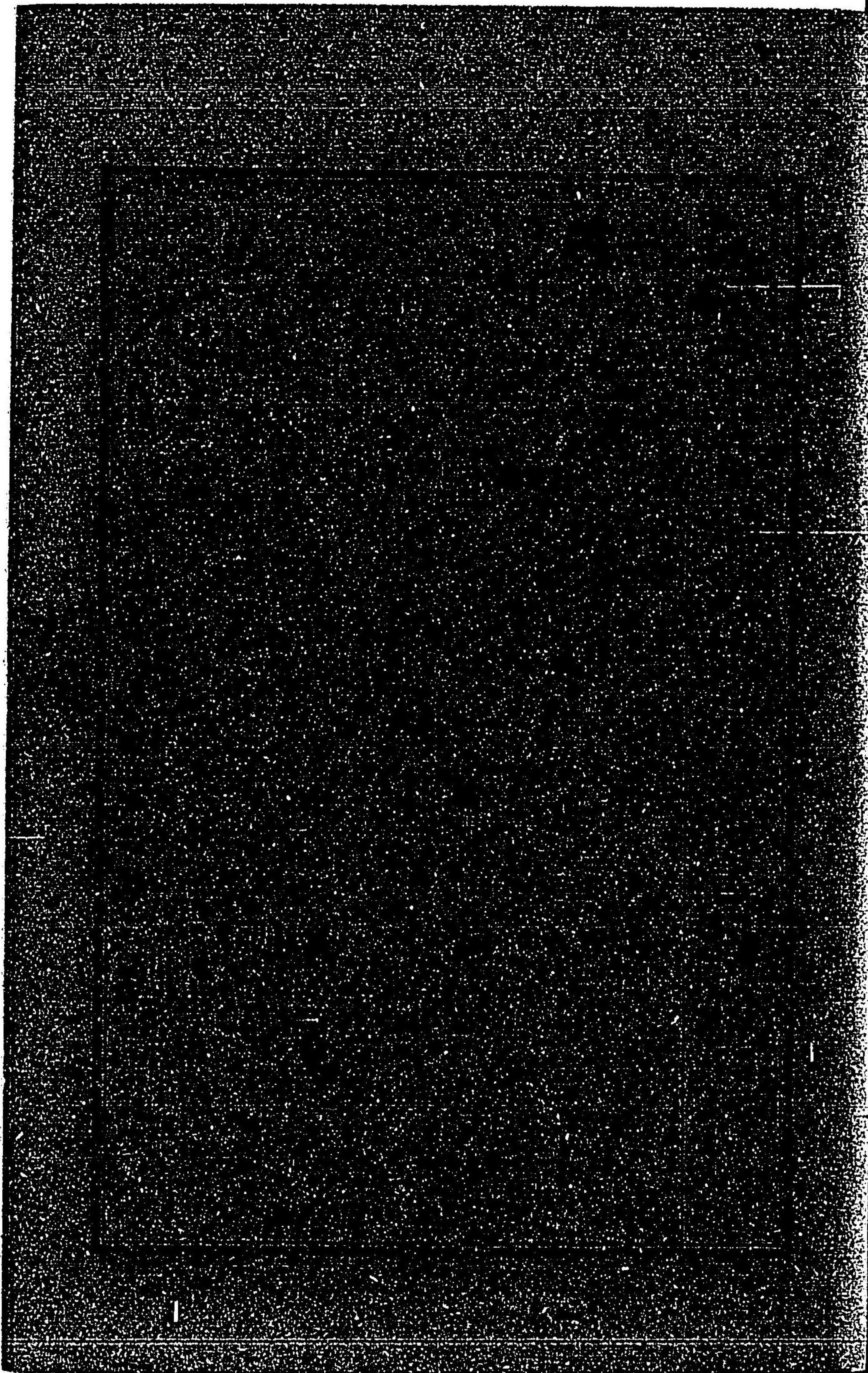
東京京橋區南八丁堀  
二丁目三番地

出版者 春陽堂 和田篤太郎

岐阜縣平民

同日本橋區通四丁目五番地





此書係由... 刊印... 凡欲購者... 請向... 函購... 每部... 大洋... 伍元... 正... 郵費... 在內... 總發行所... 上海... 某某路... 某某號... 某某公司... 啟



# 春

東京日本橋區  
通四丁目書林

## 春陽堂藏版書目概表

英國 ヒーコンスフィールド伯著

日本 跡部素山先生校補

牛山鶴堂譯述

### ● 情史 雙鸞春話

洋綴頗美本全一冊石版  
密書人定價七十五錢

天下雷名ノ政治家ハ誰ナル歟世界屈指ノ外交家ハ何人ナル歟ト問ハゞ人必ズ英國故  
 内閣總理大臣微君斯稗德伯ヲ以テ答フルナル可シ夫レ伯ハ元卑賤ヨリ起ルト雖モ奇  
 世ノ才學アリ齡十八ノ時初テ一小説ヲ著シ當時歐洲政海ノ人物ヲ褒貶スルヤ社會ノ  
 人心ハ之レカ爲メニ鼎沸シ新紙演壇上ニ批評百出論議紛々然トシテ一時輿論ヲ動  
 スニ至レリ是レヨリ伯ハ其名聲ヲ社會ニ轟カシ爾來屢々政治小説ノ著作ヲ以テ大ニ  
 其ノ名譽ヲ天下ニ博シタリ然カレモ世人伯カ政海ノ人文壇ノ士タルヲ知ツテ未ダ風  
 流詞藻ノ才子タルヲ知ラズ中ニハ其ノ花情ニ暗キヲ誹ルモノアリシガ實ニ天稟ノ奇  
 才ハ施ストシテ可ナラサルハ無ク伯紅燈柳煙ニ心ヲ馳セ畢世ノ快筆ヲ揮テ著述シ以  
 テ世人ヲ驚感セシメタル婉媚威儀睿布爾ハ能ク人情ヲ寫シ出シテ遺感ナキ粹中ノ粹  
 史情中ノ情史ナレバ之レヲ一讀スルモノ寢食ヲ忘レ手卷ヲ閣クニ暇アラサルニ至ル  
 然ルニ我カ國未タ之ヲ譯述スルモノ無キヲ以テ心竊カニ玉龜櫃中ニ藏ル、ノ嘆アリ  
 シニ今般牛山鶴堂之レヲ翻譯シ以テ雙鸞春話ト題シ尙跡部素山氏ノ校閱ヲ經獎舖ヨ  
 リ出版發兌スルニ至タレリ夫レ本書ハ譯意明瞭字句麗麗毫モ原書ニ讓ラサル完全無



欠ノ情史ナレバ世ノ才子佳人ハ必ズ一本ヲ購フテ其ノ深味ノ存スル所ヲ知レ

泥法氏原著 跡部素山校閱 牛山鶴堂意譯

### ●新譯 魯敏遜漂流記

洋製美本寫真木板 齋入定價七十五錢

本書ハ泥法氏ガ編述セシ魯氏ノ經歷ナリ氏幼ニシテ大志ヲ懷キ一日父母ニ請フテ曰ク兒驚竊文學ノ以テ望ミヲ充ス能ハザルヲ知リ海ニ絶境ニ航シ別ニ一天地ヲ相シ殖産興業ノ道ヲ開カバ恐ラクハ苦學十年ノ功ニ倍スルモノアラフ歟言狂ニ似テ業冒儉ニ近シト雖モ其ノ好果ヲ得ルハ是ヲ掌ニ指ス可シト父母聞テ放言トナシ敢テ答ヘス其再三スルニ及ンテ始メテ論ス氏用井ズ竟ニ友人ノ父ニ請ヒ躍然船ニ搭シテ去ル之ノ魯氏ガ流離艱苦ノ基本ニシテ數十年間孤島ニ起臥シ後チ奇幸ヲ得テ故山ニ歸ル迄ノ事蹟ヲ網羅シ盡シタルモノナレバ世ノ志士仁人ハ勿論婦女幼童ト雖モ一讀シテ有爲ノ思想ヲ養成セズンバアルベカラザル希代ノ珍書ナリ

### ●內地 經濟未來記

全一冊 定價四十錢

### ●內地 東京未來繁昌記

全一冊 定價四十錢

### ●社會 日本之未來

全二冊 定價八十錢

シユールスヴエル子原著 服部誠一序及校閱 田直彦譯 萬里北極旅行 大久保櫻洲訂正 寫真石版密畫入美本全二冊 定價壹圓五十錢

第一回	異形批評喧嘩坊間	第十回	抗論一百出洩憤意
第二回	衆人信書說大	第十一回	再聲一喝止風波
第三回	架空造瀛	第十二回	更傳嚴令論水進
第四回	挺身勳表當重	第十三回	踏氷壯士探訪奇
第五回	勇腕勵氣表當重	第十四回	水夫氷上懷異
第六回	怪犬履約吠船	第十五回	衆人出狼狽見怪
第七回	航解纜期日業未	第十六回	更嘗艱險志未
第八回	通力如神尙未	第十七回	衆將集難驚吐心
第九回	疾走似電渡大	第十八回	船將遭難驚吐心
第十回	洋人遙認水塊	第十九回	博將振難驚吐心
第十一回	舟天已下颯風		
第十二回	弄舌驅除塊		
第十三回	感古跡驅除塊		
第十四回	激浪奮勵冒險		
第十五回	壯士奮勵冒險		



第二十回  
第二十一回  
第二十二回  
第二十三回  
第二十四回  
第二十五回  
第二十六回  
第二十七回  
第二十八回  
第二十九回  
第三十回

船衆薪北卓嶺欲已身船船水船義船博漁風倭氷船博  
將人炭光上頭凌迫冒折將夫將士將士遊壽豎塊將士  
枉燒將漸認望冬嚴萬難柱裝提意途失垂快危漸全雄高  
意船盡明狐天期寒勢事銃挺中上望淚話險現散辨談  
姑少衆仙客巨蒼海成絕追危意令途友室塔愁司心路夫夫  
容假心愛喜  
言煖憂

第三十一回  
第三十二回  
第三十三回  
第三十四回  
第三十五回  
第三十六回  
第三十七回  
第三十八回  
第三十九回  
第四十回  
第四十一回

氷雪衆船彈糧小十死英謀欲壯倭水暴倒掬霧氷遺胃  
山中將藥食山七者雄凌得士豎夫風標雪中上敷  
半破免廻散巳麓日蘇策凍薪胃臨雪曉中下吹屋人鼻全山泊  
腹船飢奇盡難難宿行報挫陷失救燒吞苦屋人鼻全山泊  
築得渴策難難宿行報挫陷失救燒吞苦屋人鼻全山泊  
城糧上獲獵凌飢堂原恩膽難食歸通死破來全山泊  
廓食途熊獸飢

第四十二回  
第四十三回  
第四十四回  
第四十五回  
第四十六回  
第四十七回  
第四十八回  
第四十九回  
第五十回  
第五十一回  
第五十二回

博英谿小博兩谿北破一內外船米長連寒鮮氷山兩新  
士雄問春士雄問極裂振盤防將人夜日暖肉原頂雄築  
垂逢水天振爭氷春爆斧天猛室戶團風說美放積氷名工  
淚災綠晴辨權雪光藥鐵井獸內外樂雪明味銃獲築生祝  
祝霽富慰爲生解來滅望散籠談警事鎖極適獲築生祝  
和宿仙獵和紛又又猛博鬱氷氣室志難誠戶理口馬臺謹成  
陸怨境者解紆結去獸士氣室志難誠戶理口馬臺謹成

第五十三回  
第五十四回  
第五十五回  
第五十六回  
第五十七回  
第五十八回  
第五十九回  
第六十回  
第六十一回  
第六十二回  
目錄畢

舉功懷守壯英傾振北王俄遙北一深無山湖築修  
高成邪正士雄心辨極島失認洋極葉谷人頂上造繕  
名身道刻决壯博點海船將黑烟舟中境雪氷如行橋  
著退者者石死士士上濱救衆將物論奇五海人鮮血盤  
事死生吊登聞說天火將驚起怪傑鳴跡  
全曝歸英山講文山將驚起怪傑鳴跡  
終閑骸國魂頂談文山將驚起怪傑鳴跡



此書奇ヲ以テ起リ奇ヲ以テ畢ル初メ人ナシテ捕風捉雲ノ思ヒアラシ  
 メ前半ヲ讀過スルニ及ンテ神出鬼沒愈ヨ佳境ニ入レバ殆ンド端睨ス  
 ベカラザルモノアリ其犬ヲ船將カト訝ラシメ船將ヲ水夫中ニ起ラシ  
 ムルガ如キ構思絶妙而シテ倭豎船ヲ燒クニ至テ讀者ヲシテ驚嘆措ザラ  
 シム殊ニ感ズ可キハ英米人ノ氣慨ヲ分説シタルト北極ノ地理ヲ詳説  
 シタルニ在リ是ヲ以テ之ヲ學理上ヨリ論ズレバ北極ノ地誌ト謂フベ  
 シ全體上ヨリ評スレバ絶世ノ奇書ト謂フベシ

# 内地雜居準備全

美本定價廿五錢  
 實價十三錢

目下政府にて談判中ある條約改正の實施すると同時に内地雜居も亦  
 た舉行せらるべし都會僻陬の區別亦日本全國至る所に西洋人の雜  
 居するととなりバ言語の通ぜざるの兎に角も日用交際法すら知らざ  
 るに於ては随分困却の事あるべし此書の從來我邦に行はれたる舊習  
 陋拙の慣習を廢して西洋の交際法の勿論都て内地雜居の準備とある

べき方法を説明したるものあれば一讀して豫め内地雜居の實施を俟  
 ち玉へ

英國 權男爵蘇骨士原著  
 素山跡部正道校補  
 服部誠一序  
 鶴堂牛山良助意譯  
 岡村政子畫圖  
 政治 小説  
 梅 蕾 餘 薫  
 全二冊 絶無美本最上石  
 版插畫紙數六百  
 頁餘定價金壹圓  
 九拾錢

此の書は英國小説家の上流にある蘇骨士氏が多年思考を凝し滿腔の  
 意匠を盡して著したる小説あり其初め筆を犁查士一世の半ばに起  
 し同王壓虐の有様人民疾苦の慘狀轉じて同王澳太利亞に崩れ配所  
 に在るの景况王弟戎公爵の陰謀武士野仕合の現狀四種族の憤争憂世  
 壯士の快活以汎波の勇敢朝宇娜女史の貞操令警可女の戀情等前編總  
 て二十三回爲めに悲み爲めに喜び爲に愛る爲に怕れ或の信或の義或  
 の仁或の忠喚天叫地激怒痛哭の狀歴々察す可く思ふ可く素山先生が  
 筆華を添えたる小説あり行文の是非の書肆敢て贅せず世人是を知ら  
 んと欲さる乞ふ購ふて梅蕾餘薫に問へ